

特216
538

歴史の足環



始



歴
史
の
平
壤

平安南道教育會編

特276
538

目次

平壤の化石林	一
有史以前の平壤	一〇
壇君傳説と平壤	二七
箕氏朝鮮と平壤	三九
衛滿朝鮮と平壤	五四
樂浪時代と平壤	六二
高句麗時代と平壤	七九
文祿役と平壤	一〇一
日清戦役と平壤	一三三





林 石 化
(\times 存 現 = 按 學 中 填 平)



石 器

平壤の化石林

(一)

大正四年、平壤中學校の敷地を平壤府南山町の西方高地に相して土工を起し、大同江水面より高さ約十間の頁岩地層を深さ一間ばかり切り崩したるに、偶然(口繪参照)圖の如き化石の林立せるを發見したのである。其數合せて十箇何れも根部迄自然の状態を保存したる儘、西北に傾斜して竝立し、高さ四尺乃至六尺、周圍は大なる部分に於ては、八尺乃至一丈二尺である。化石の皮層部は稍々黒色を呈すれども、木肌平滑にして縦線を表はし、中心に至るにつれて灰白色に變じ

年輪狀の輪層は、其數百に及び硬さは、六度即ち小刀の刃に匹敵するものである。

二

(二)

現在、類似化石の所在地は

- 一、牡丹臺お牧の茶屋の北側(廢朽す)及び石切場
- 二、山手小學校々庭(廢朽す)
- 三、刑務所門内
- 四、中學校々庭

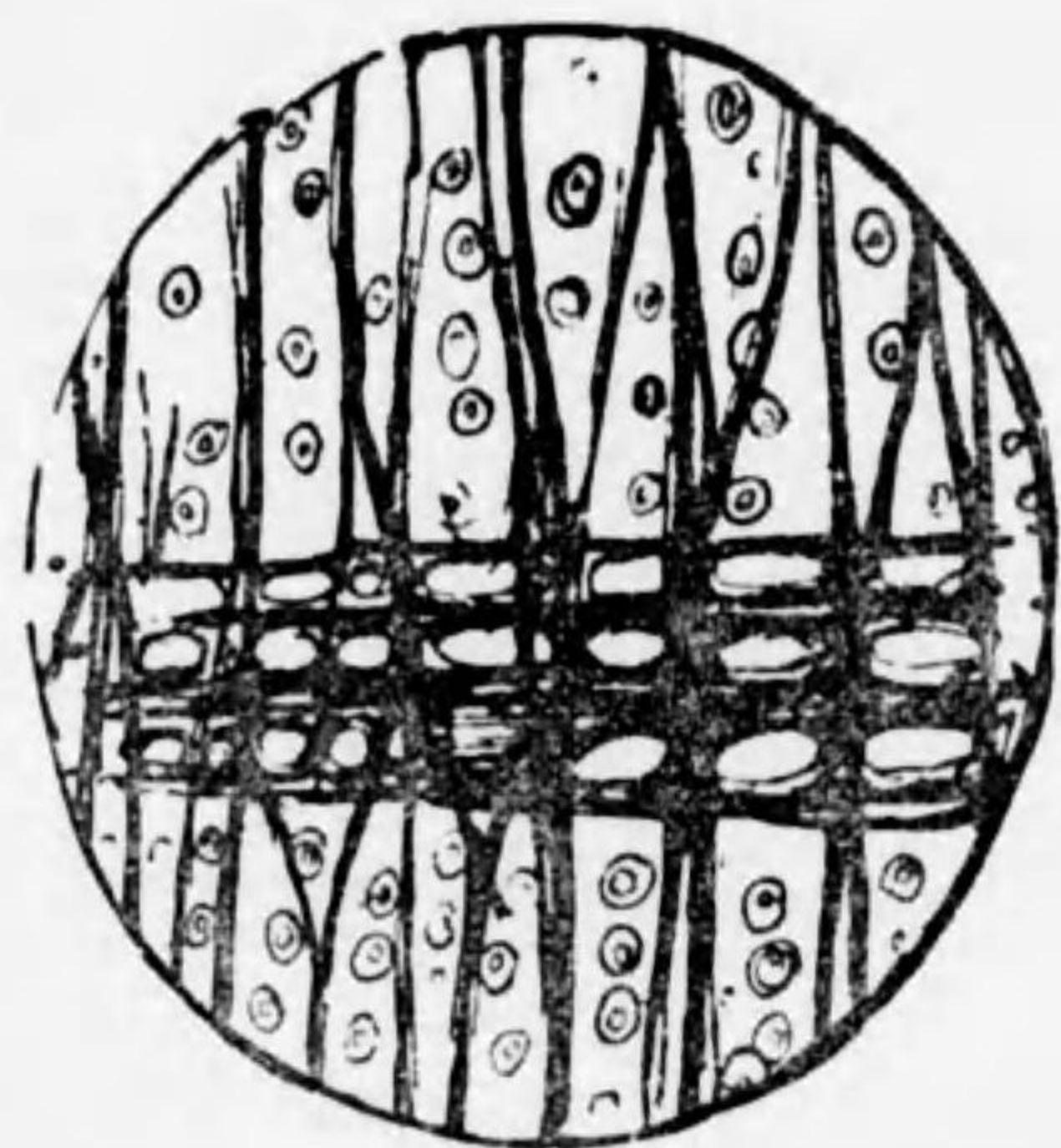
で、その外廢朽せる小破片は牡丹臺背面附近よりも發見することが多いのである。

(三)

太初此地方は、山岳丘陵で圍まれたる凹字形の一大盆地をなしたために、四周の高地より、風雨の度毎に押流されたる、土砂は次第に此凹所に集積して、層々相重りて、現今牡丹臺及び大神宮前及び平壤中學校化石林下の地盤等の砂岩層をなし、之に亞いで洪水氾濫の度毎に粘土を運搬して、相重ねつゝある際、附近一帶の地盤の隆起上昇を來し、随つて乾固して陸地となり、遂に侏儸紀に於て、松柏類の如き、裸子植物を生じ、發育盛にして、終に大森林をなしたものと想定せられる。其後の地變力は此地を再び沈降せしめて、洪水の度毎に泥土を沈積せしめ、その根元を埋没し、水中又は空中に露出せる部分は、腐朽

三

し去りしも、地中に埋没せる部分は、爾來幾星霜を経て、化石せしものであらふ、其後再度の隆起作用を來たして地盤の上昇を促し、高臺丘



(切目板)面斷心透の材石化

陵の地と變ぜしもの、即ち今日の平壤地層上皮ではないかと考へられる。

(四)

本化石を、板目切、板目切、小口切等種々なる方向に切斷せる薄片を造りて、顯微鏡下に窺へば其の構造において、現今の松柏類の材の構造に類似の點尠からざるを發

見すべく、殊に板目切に於ては紡錘形の細胞中に、二重の環紋の相並べるは、これ即ち松柏類特有の重環紋假導管と稱する組織よりなるもので、これによつて見れば、疑もなく過去に於ける松柏類に屬する植物が化石せるものと推察するを憚らないのである。

(五)

抑々本地層は、片磨岩又は古生大統を基底岩とせる岩石を、不整合に被覆せる地層で、主に頁岩、砂岩及變岩より成り、且つ無煙炭を埋藏し、尙石灰岩をも有することあり、所々に侏儸紀特有の菊石類等の化石を産するものである。此地層は平壤江西間の大同江畔に發達著しきを以て、特に名けて大同層と稱してゐる。本化石は此地層中に含有

してゐるものである。其歴年數に就ては、其の根本問題である地球の年齢そのものが、漠然として地質學上、理化學上、各方面の學者が各自の研究方法によりて、計算せる年數に於て、其の誤差が餘りに、大にして、彼此撰擇に苦しむをもつて、一般に數字を以てせずして、之れが代表的産物たる化石及岩石の特徴を標準として、區分的名稱を附するを通則とすること、例へば、中世代を、三疊、侏羅、白堊の三紀となせるが如し。されど吾人をして、今假りに其概數を以てするを許すならば、地球が太陽より分離して、現今に至る迄は、二億年乃至四億年をもつて、地殼の確立以來、今日迄を二千萬年乃至二千五百萬年の間ならんと唱ふる説を採りて、今之れを二千萬年とし、且之れを各時代に於ける地質成層上の厚さ、又は硬さ等の事柄に比例して、始原代六割、古生

代三割弱、中生代一割、近世代は僅々十分の一割強の割合に配當すれば、中世代は二百萬年の昔と云ふを得べく、更に之れを三疊、侏羅、白堊の三分紀に分配せば、本化石の生育時代は、今より百萬年乃至百五十萬年の昔なりしならん。更に之れより神武帝の建國に比較すれば、優に三百五十倍、耶蘇紀元に比しては、更に五百倍の太古に於ける大自然の造營物なりとせば、其の幽遠なる誠に驚くべきものである。

(六)

本化石は、化石學上、硅華木又は硅化石、石化木と稱するもので、か
の名高き九州博多附近の名島の帆柱石を始め、其他各地に發見せら
るゝものと同じく、一言以て之を蔽へば、植物と礦物との抱合體なり

と云ふべきである。蓋し、空氣流通不充分なる土中に埋もれたる樹木が、腐敗を免かれ、一方酸化分解等の作用が漸次的に行はれて、有機成分を揮發し、其殘留物として、炭素分を止め、更に地變力のために、一層地下深處に埋沒せられたる場合に於ては、硅酸分を溶解せる地下水稀には多少の鐵粘土を混じたるものが、之に接觸して、其變質の道程にある植物組織中に滲入し、硬さに於て、水晶に匹敵するに至れるは明かに礦物質の存在を物語るものである。更に其の石化の程度に就ては、初期(蛋白石化中期玉髓化)を突破して、老年期石英化に到達せるものなれば、化石の程度は、完結せるものなりと謂ふべきである。

(七)

以上述ぶる所を一括して見れば、平壤中學校の化石林は大約百萬年乃至百五十萬年前に於ける中世代侏儸紀に生育せし、松柏類が其の地下に埋沒して、硅酸化せる化石木なりと云ふべきである。然し乍ら本化石が、松柏類の如何なる種屬の植物であるかの問題に就ては獨人カールゴツチエ氏の牡丹臺に於ける採集材料に就いて、フェリックス氏の研究によつて發表せるセドロキシロンならんと稱すれども果して然るか否やは大に後日の研究を俟たねばならんと思ふのである。

有史以前の平壤

(一)

吾人の活動舞臺たる平壤地方の有史以前の状態は如何。言ひ換ふれば、當地方には何時の頃から人間が居住して居たであらふか。此の事柄は、實に興味ある問題であると共に却々の難解に屬する。支那及び朝鮮の文獻を繙いて見ても、此の事に關しては何等教ふる處がない。たゞ檀君の傳説、箕子の朝鮮を以て筆を起してゐるに過ぎない。其の後、漢の樂浪郡治時代に至つて、漸く破壊散逸を免れた史料に基き、歴史的、考古學的に考證せらるゝのみで遠き太古の昔は謎の世界と

も言ひ得やう。果して吾人は、所謂歴史時代以上に遡る能はずして、此の秘密の扉を鎖したまゝに絶望すべきであらふか。若も假に、此を以て最上の智識なりとすれば、常に漢族移住後の時代より筆を染むるか、若くは、口碑傳説を尋ねて、歴史の幕を開くべきかであるが、今日の進歩せる史的考證は此のみでは満足を許さない。即ち學者の手によりて、人類學上、先史考古學上の立場から科學的研究が遂げられて、今や有史以前の歴史を明かにせらるゝに至つたのである。

抑も、太古の未開野蕃人は、如何なる場所に居住せしやといふに、多くは日當りのよい温かい、海岸線、大河の江畔、丘陵の上、又はなほ高い山の上等に居つたものであつて、是等の場所に於て、其の遺物遺蹟が

発見探査せらるゝのである。遺物に依つて見るに、當時の民衆の用ゐた利器には、石器としては石斧、石鑿、石簇、石劍等があり、骨器は主に、鹿の骨を用ひて鏃とか錐とか劍などを作つた。此等は、石器時代（有史以前）に屬するもので、當時の民衆は、未だ野蠻草昧の域を脱せず、岩石や獸骨をもつて鏃、斧、劍等の武器を作り、以て他の動物に對したものである。又彼等の遺蹟には、高杯、皿、壺等の破片もあつて、是等の土器は、當時の文化程度を窺ふに足る資料となるのである。

昔は、朝鮮人は、斯る石器の何物であるかを解せないで、落雷の時天から降つたものだとか、或は落雷の作用で、石が急に形を變へたものだとか考へ、雷斧、雷箭などと稱して珍重がり、之を発見すると國王に奉つて褒賞に授つた等のことがある。

半島内各所に発見せらるゝ石器は、其の製作上から多少地方的の區別があるけれども、大體から云へば、滿洲に発見せられるもの竝に日本内地で発見せられるものは、何れも同一系統であつて、殆んど磨製である。打製のものはいづれも無いといふてもよい位であつて、學者の所謂新石器時代に屬するものである。

(二)

さて、平壤地方に於ける此等の遺物の散列地を探るに、大同江流域一帯に亘り、就中、最も注意すべきは、寺洞、美林里、高坊山等一帯と大同江に瀕する丘陵若くは山上で、實に石器時代の代表的遺蹟と見るべきものである。

イ、寺洞

一四

寺洞に於ては嘗て、海軍燃料廠事務所一帯の地の地均、植樹の際、偶然此の遺物を認め、世の視聽を蒐めたものであるが、當時露出したる遺物は石斧、石疱丁、重り石、石槌、石劍等で土器としては、僅かに其の一小破片が発見せられたるに過ぎない。

石斧は當時、勞力と時間との節約から、多く斧の形せる自然石を大同江の河床より選り來つて、之を磨り減らして拵へた磨製又は半磨製のものであつて、その形狀は蛤刃のものが多く、中には片刃の物や、鑿の刃形のものもある。石疱丁は半月形で、木片又は鉋を通ぜるために、一方の上部に二つの孔を開け、魚類等の料理に用ゐたものであらふ。石鏃は磨製のものである。重り石、魚網の錘石は、共に大同江に漁

獵したる器具の附屬品と見るべく、當時大同江の魚類を食料に供せしことを察するに至り、また不完全ながら網を使用せしことも推測せられる。石槌は専ら物を碎くために用ゐられたもので、今日の槌と同じ用途である。

石器時代の民衆が殘せし此等の遺物と、其の遺蹟の有様等より察して、彼等の生活状態を判斷するに、日常の利器としては、石斧、石疱丁を使用して生活を助け、狩獵鬪争には、石鏃、骨鏃の弓箭を射たものであらふ。彼等の護身用としては、石劍を用ゐ、此を皮鞘に納め、武士の刀劍の如く腰に帯びたものと思はれる。又重り石、錘石の發見せらるゝより見れば、當時、盛に大同江の魚類を捕へて食料に供したる事を察するに難くない。文化史上より言へば、彼等は明かに自然民族で、未だ

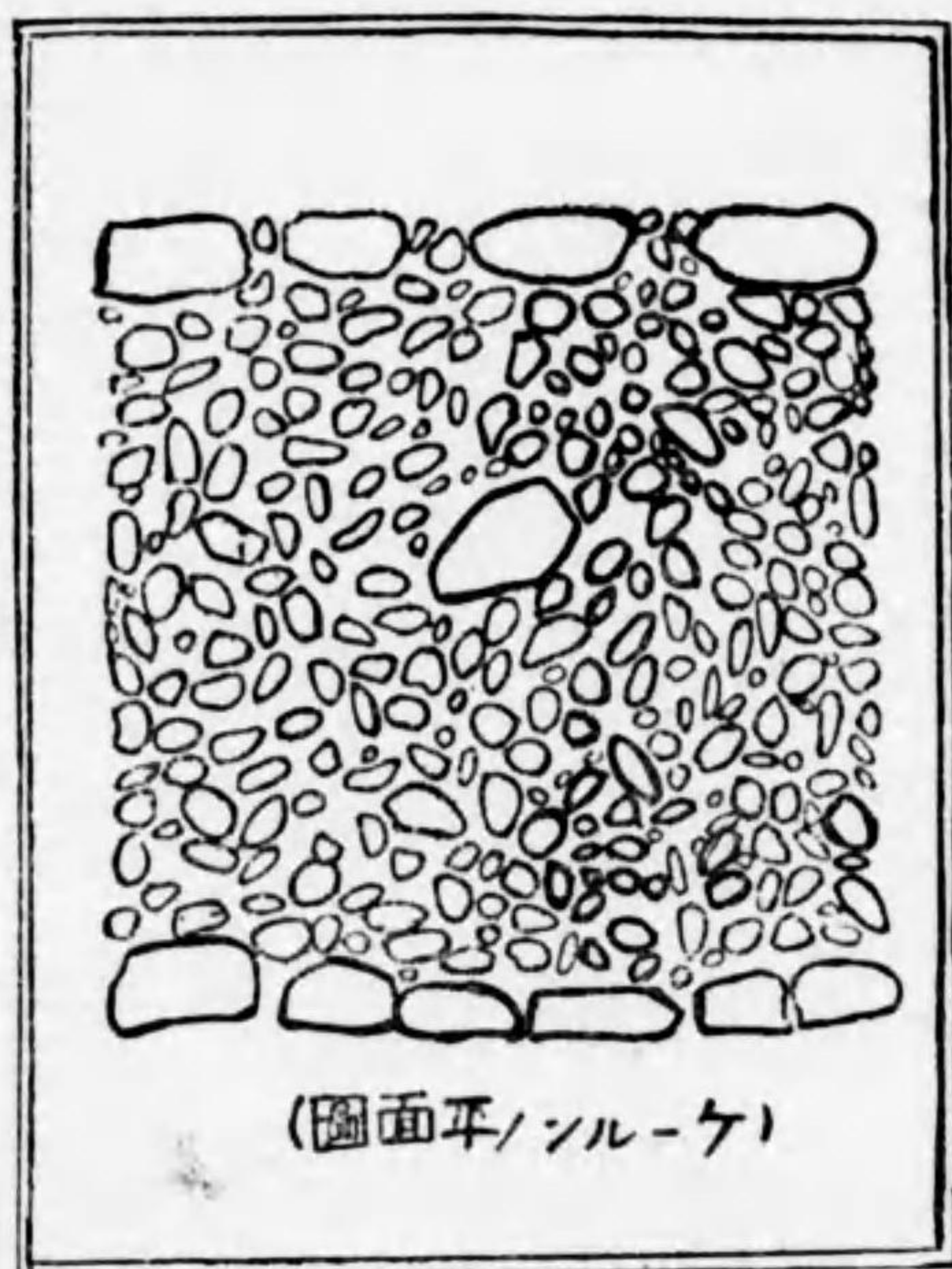
開化民族の域に達してゐないものである。

口、高坊山

渡船場を上つて、畑地丘陵山腹一帯の地に、石器時代遺蹟の散列するを見る。遺物は寺洞方面のものと大差なく、石斧、石庖丁、石鏃等の類で、たゞ此等にては石斧の刃の損傷せしときに用ふべき砥石の發見があつた。

此の地にて特記すべきは石塚である。上記の遺蹟附近に四箇所餘り自然石を亂雜に堆積せるものがあつて其の周圍の下部には稍大なる石を置き其他は、溪谷の小石を積み重ねたものがある。今日は高さ四尺程で、形は四角形一邊の長さ三間餘、周圍十二間餘、二邊の縁は内部よりも大なる石を以て積まれ、他の邊は取り去られたるためか

石鏃等を入れて武装をしてゐるものがあつて、未來に對しても戦を



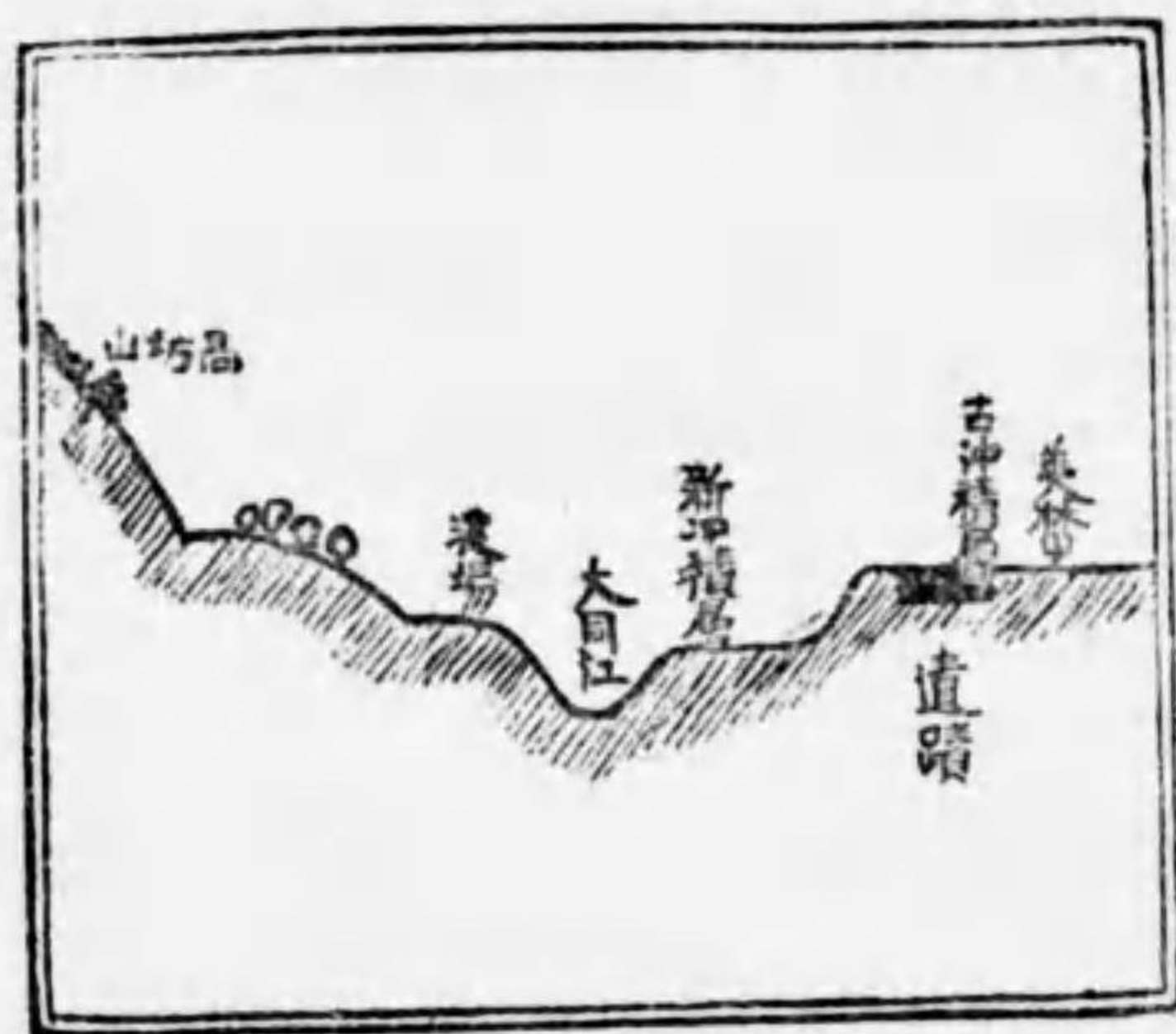
(圖面平ノシル-ケ)

今は残されてゐない。これ所謂石塚(ケールン)の一種で、墳墓に屬し、死體の周圍に石を以て垣を作り其の上に自然石の破片を積み重ねたもので最下部に殊に大なる石を用ゐたのは、周圍の縁の崩壞を防ぐ爲の用意である。完全なるものは、積み石高くピラミッド形を呈し、中に死體を置き、其の傍に石劍

するの意か、宗教心の研究上非常に面白いことであるが、此處では、既に發掘せられたためか、僅かに其一部を残すのみである。以上の遺蹟が、其の位置が普通の居住地たると同時に、墳墓の跡を存することは注意すべきである。

八、美林里

美林里の遺蹟は、大同江に面する沖積層中であつて、他地方の如く遺蹟散列地にあらずして、全く遺物包含地で、随つて今日に於ても尙能く有史以前の當時の状態が保存せられ、研究上重要な地帯である。遺蹟の埋藏は實に地下一尺五寸餘の處で、此の地上を歩行しても全く認むる能はず、大自然の保護の下に今日まで人手に觸れなかつたのは幸であつたのである。この發見の端緒は數年前、平壤鑛業所(今



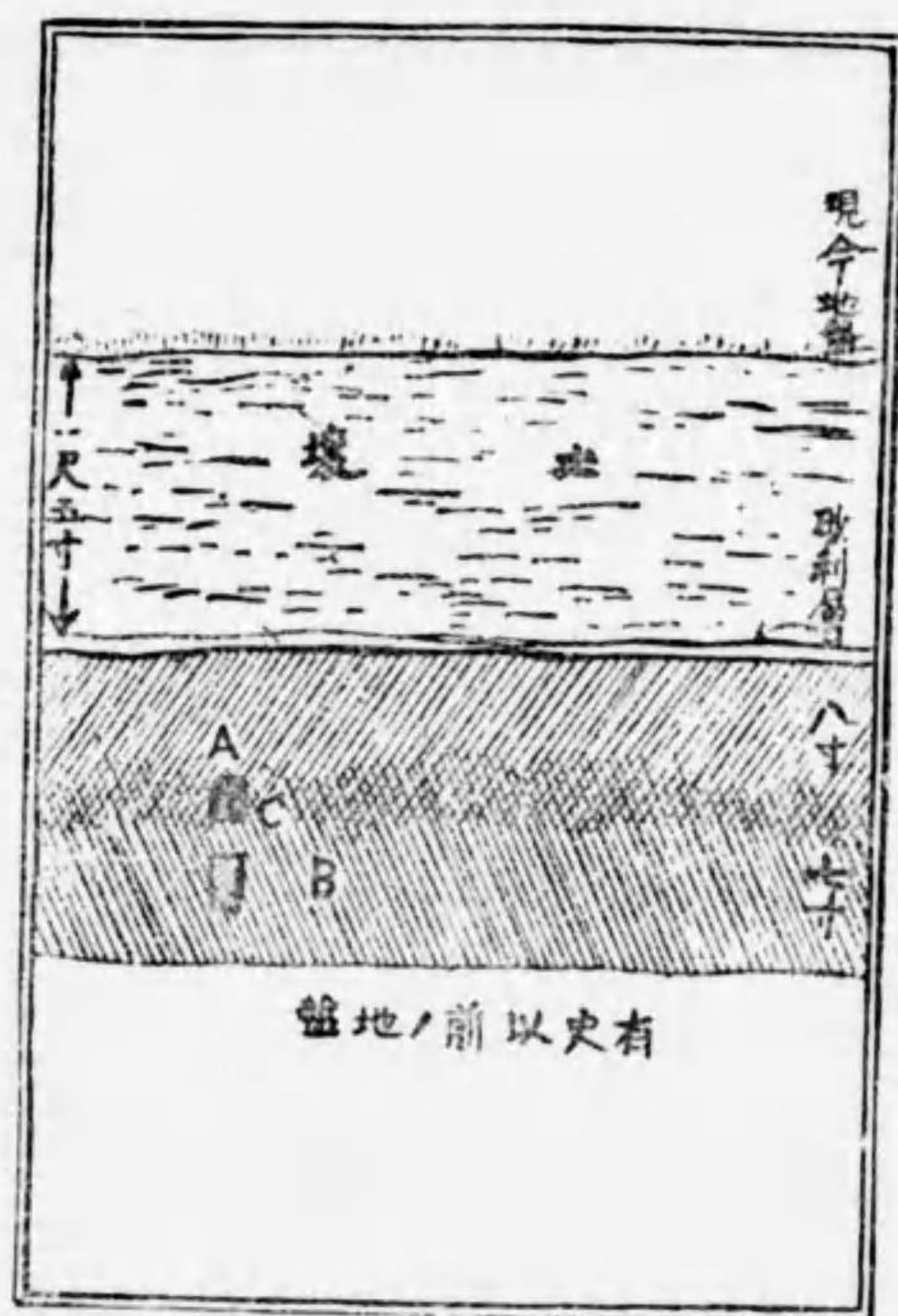
の海軍燃料廠)が、石炭運搬のために此處に、鐵道線路を敷かんとして

の土工の際、偶然掘り當てたもので、骨片の無數に發掘せらるゝため、當初は戦死者を一時的に埋葬したる場所と考へて居た程であつた。

現今の地層より一尺五寸程土壤を掘り下げると、頗る薄き砂利層に達する。石は凡て河床に見る河原石で、自然に水平に竝べられてゐる。蓋し洪水又は流水の作用で、斯くの如く水平に堆積せるもので、俄然大同江が大汎濫して此處に及び

て、石器時代のある時期に於て

しか、或は此地が小川の流れ又は水溜りであつたかである。



参照。此二層相連続して其の下部は、全くの地層となり何等の人爲的

美林里の遺物包含層の断面
 下には骨片及び土器破片等を包含する八寸程の層がある。今此處には假りに之をA層と名づける。また此の下部に之に似たる七寸程の層がある。之をB層と名づく(挿書を参照)

遺物を藏して居ないのである。右のA B二層の間には、恰も一種の過渡期とも稱すべき間層がある。

(A層)

此のA層を精査すれば中には動物の骨片、土器の破片、木炭等が発見せらるゝ。骨片は哺乳動物、鹿、猪、犬、牛或は牛齒より大なる齒を有する動物の骨が多く、次ぎに鳥類の骨片があり、また僅かながら貝殻も包藏されてゐる。是等は當時の食料に用ゐたるものゝ残片で、其の殆ど同一の太さに折られて居るのは、鍋等で煮るに便利の大きさとせるものと考へられる。なほ層中に炭及び木炭の小破片のあるは、食物の調理等に使用せし薪炭の残物で、木炭は樹木を焚きたるものである。其の木目を見るに多くは栗樹のやうである。憶ふに有史以前、此地

方は一帯に落葉樹の繁茂せる一大深林で鹿猪の片骨の包藏せらるゝより見るも、當時深林中には斯の如き哺乳動物が群をなして棲息せし事が想像せられる。今日なほ美林の名あるは地名考上意味が深い。

更に當時民衆の使用せし考古學上の遺物として如何なるものが存在したかといふに、人造物として最も多く残存せるものは土器の破片である。その種類は固より多からずして、壺鉢の類に過ぎないが何れも砂利混りの素焼で多くは無紋様である。若し紋様があつても肩の部分に幾何學的紋様が少し用ゐられて居るに過ぎない。また特殊のものとしては、土器の小破片を其の周圍を削り落して、田字形のものとして、子供の玩具に用ゐたるが如きものもある。

次ぎに、此の層にては利器として、石器を用ゐたる形跡なく、専ら鐵を以て此れに代へられたるは注意に價する事で、小刀子の破片及び釣針状のものが出土し小鐵塊をも存留してゐたのである。本道内に於て、漢墓以外に古き鐵器を出す遺跡は、他に未だ見ないのであつて、而も儀式的に使ふ種類のものでなく、實際生活に必須のものを、その生活せし場所より見出したのは、又一大資料として取扱はるべきものであらふ。

抑々、世界人類發達の順序を考察すると、最初は石器を使用する所謂石器時代で、次ぎに原始時代に入り、而して歴史時代に移るのである。この原始時代は更に前期と後期とに分たれる。原始時代前期は石器時代よりの過渡期に屬するもので、山中より鑛石を採り來つて金

二四
 屬を還元して武器其の他の器具を作り、石器と共に先づ青銅器の使用を始め、進んで後期に至つて鐵器を用ふるに至るのである。この順序から見れば、A層に遺した住民の文化は、金石を併用せし原始時代前期に屬するものと認められる。然も其の金屬が鐵器であることより察するに、此等の住民は永く石器使用時代にあつたもので、支那の文明が既に鐵器時代に入つた後、其の影響を受けて、若干の鐵器を使用するに至つたものと思惟せられる。

彼等は、單に鐵器使用者なりとは言へ、其の生活状態は全く原始的で、鹿、猪、犬等の哺乳動物を喰ひ、且つ狩獵を専ら事とせるより見て、所謂自然民族であつたのである。

(B層)

A層との間に僅かの間層を隔て、下層にあるB層は、前者に比して人類學上、考古學上、大に性質を異にするもので、遺物の中、鐵器と認めべきものなく、純然たる石器時代に入るものである。まだ、此の層に於ては、鹿、猪、犬或は齒牙の大なる動物の一小骨等の骨片があつたが、A層より久しく時を經過せしためか、其の數量は遙に少い。

此の時代の區劃を語る資料としての石器は、石斧、石庖丁、石鏃、砥石、石環等が存在し、其他骨器、土器の破片等が発見せられる。

以上の如くB層は人類の文化史上、純石器時代に屬し、A層は原始時代前期に擧ぐべきもので、此等A、B二層は厚さ僅かに一尺五寸程に過ぎないが、永き歲月の經過ありしは明かである。

要するに、美林里の此の遺蹟縦斷面は民族の年代記を縦にありの

有史以前之平壤

まゝに示せるもので、實に平安南道に於ける有史以前より漢族の移住、扶餘族の侵入其他と併せて研究を試むるに好箇の一大資料である。



(部内)



箕子陵

壇君傳説と平壤

(一)

朝鮮の人々は、開國四千年と唱へる。それは、壇君をもつて半島最初の受命の君であり、朝鮮民族の祖王であるとし、且つその出現を今より四千年前の支那唐堯の時に當ると信じての叫びである。

かくも、彼等の誇りであり、信念である壇君傳説に關して考察を試み、殊に平壤府との因由を採るのも興味あることと思ふのである。

壇君傳説の始めて朝鮮文獻に現れたのは三國遺事である。この書は高麗忠烈王の時代、釋一然の撰であつて今より凡そ六百五十年前の著である。同書に於ける壇君傳説の要領は、

「古記に云ふ昔、桓因（帝釋をいふ也）の庶子桓雄といふ者が帝釋の命を受けて、太伯山頂（平安北道妙香山）の檀樹の下に降り、此に熊女と婚して、子を生まし、號して壇君王儉といつた。壇君、後唐堯の頃、平壤に都して朝鮮王となつた。國を御すること一千五百年、周武王即位の年、箕子を朝鮮に封じたので、壇君は他に移り、後退隱して山神となつた。壽一千九百八歳」といふ。

のである。こゝに古記とあるは、勿論三國遺事撰者の資料であるが、それらの資料は、すべて散逸してゐるのである。其他同じく釋一然の撰である佛國寺事蹟に、壇君の事が略述されてある。

(二)

この三國遺事に現はれた壇君傳説を解剖して見るに、先づ壇君とは何を意味するかを考へねばならぬ。一説には、壇君とは、佛書中にある旃檀といふ香木の精靈を神化したものであると謂ふ説があるが、之は世宗實錄地理志以降、壇君をば壇君に書き換へてからの推測説である。傳説の出所たる三國遺事の古本には悉く土偏の壇君が用ひられてあるのである。壇檀、何れも「タン」の音であるので、後に木偏の字を借用したに過ぎない。日本讀みの「タンクン」は朝鮮讀みの「タンニム」で「タンニム」は、即ち「タルニム」の訛で、其の意義は、山君、山主又は山神といふことである。三國遺事に掲げられた壇君傳説は、本は妙香山の山の縁起に外ならぬのである。而してこの山神を何故、桓因即ち帝釋の庶孫としたかといふに、之は古くから、此の山に釋提桓因が住んで

居るといふ傳説があつたからである。

(三)

この妙香山山神の縁起と並べ考ふべきは、高麗朝時代に存した平壤仙人説である。高麗史の妙清傳に依ると、僧妙清、國王仁宗に説いて平壤の附近に大華宮を造り、八聖堂を宮中に置いた。この八聖の中に駒麗平壤仙人實德燃燈佛、といふが掲げてある。この實德とは本地の意である。また仙人とは印度に於ける佛、菩薩等の權現であつて、佛法に附會したものである。恰も日本の本地垂迹説と同様なのである。

又、金富軾の三國史記には「平壤者本仙人王儉之宅也」とある。王儉とは平壤の仙人の名である。この書は大華宮を築かれてより、十四年後

の著であるから、當時、平壤仙人なるものが一般に信じられて居たものと想はれる。而して、平壤は高麗時代には西京として、首都開城に次いで重んぜられ、又その以前は高句麗の國都であり、往昔は聖人箕子の渡來した處であると信じられて居た。斯くの如く古昔より重きをなした平壤の開闢縁起を物語らむために、生れたものが壇君傳説であつて、この平壤仙人の説と、平壤と最も近い名山である妙香山の山神縁起とが抱合して、山神即ち壇君が此の地に降つて都をなし、始めて朝鮮と稱したと作爲せられたものであらふ。

(四)

抑々、平壤の地は、高句麗時代には國都として繁榮を極めたるも、國

亡びてより著しく荒廢し、僅かに、其の間に遊獵する女真人があるのみであつた。新羅の末期に至つて、かの弓裔が新羅に叛いて建國するや、この地も其の領有に歸し、次いで高麗朝に入り、高麗太祖王建は益々其の經營に力を盡し、遂に西京とした。太祖の訓要と稱するものに「西京は、水徳調順にして我國地脈の根本、大業萬代の地たり、宜しく常に四仲巡駐し、留過すること百日以て安寧を致すべし」と謂つて居る。

當時平壤が如何に重要視せられたか、之を以ても知る事が出来る。然るに、西紀第十三世紀の後半に至り、大陸には蒙古が勃興して比類なき大領土を占め、高麗に對して非常なる威壓を加へたので、高麗高宗は其の正朔を奉じたのみならず、平壤以北は悉く其の有に歸し

たのである。この時、蒙古は平壤に東寧府を置いて之を支配した。東寧府の置かれたのは、元宗十一年（西紀一三二〇）である。

斯の如く、始祖大業の根本地が北虜の有となつては高麗、微弱たりと雖も、憤慨せざるを得ない。壇君を以て平壤の開祖とする傳説の起つたのは、恐らく此の期間か、若しくは、其時遠からざる間であつたと想像される。この傳説の主眼とする處は、往昔聖人箕子が支那より渡來する遙か以前に於て、支那唐堯と時を同じくして、半島特有の神人壇君が平壤に都して國を開いたことを云つたもので、其の反面には、此の地が蒙古の如き蕃夷によつて領有せらるゝ理由なきを示したものである。

(五)

李朝になると壇君の記事は、諸君に散見してゐるのであるが、就中平壤府沿革に載せられた要領は、

「平壤府は本、三朝鮮高句麗の故都である。唐堯戊辰の歲、神人有つて太伯山檀木の下に降つた。國人立て、君と爲し、平壤城に都して檀君と號した」とある。

而して成宗の十六年、即ち今より凡そ四百四十年前、徐居世の東國通鑑の出來た時には開卷第一に壇君朝鮮を置いたのである。爾來壇君の傳説は益々國中に宣傳せられて、壇君の名を聞知せざるものなきに至つたのである。而も三國遺事の壇君傳説と李朝時代の諸書に見ゆる壇君傳説とを比較すると、遺事の壇君は即ち王儉仙人であつて、平壤城に都し箕子が平壤に來るまでの間、朝鮮を治めた王と云ふ

に止まつてゐるが、高麗末から李朝の初に至る迄に此の傳説は大なる發達を見、愈々全朝鮮民族の祖王たるべく唱導せられてゐるのである。

(六)

壇君傳説がかく發達して來た事情は、要するに、支那の大舞臺に於ける民族的盛衰が、朝鮮人士に與へた影響の現れである。

高麗朝の頃、支那の大舞臺に勢威を示してゐたものは、蒙古族の遼その遼に代るに滿洲族の金、金に代るに蒙古族の元といふ有様で、皆皇帝を稱して、漢人の王朝を壓迫し、或は之に臣禮を執らしめてゐる。殊に、元の如きは、世界を震懼せしめた大帝國となつて、半島に非常な

る威歴を加へて居る。この大變動がどうして朝鮮民心を刺戟せずして止まふ。

即ち從來、朝鮮民族が蠻夷視してゐた此等塞外民族が皇帝を稱して威を振ふに至つたために、朝鮮人士が大なる自覺を起し、自尊心を高め、朝鮮人自身のものである始祖を欲求するに至つたのは當然である。この氣運に投じて發達したものが、即ち壇君傳説である。

而して李王朝はこの傳説を巧に利用したのである。朝鮮歴代の王朝は常に其の始祖と傳へられる神人を祭つてゐた。例へば高句麗は朱蒙を、新羅は仙桃神母を、王氏高麗は高句麗の後を繼ぐものとして、矢張り朱蒙を祭つて、自家の尊嚴を高めんと圖つて居た。

李王朝は如何といふに、咸鏡の一武人より擡頭して國を建て、支那

に臣事して朝鮮なる國號を受け、箕子朝鮮の後を受けたものとして半島を統治したのである。さりながら、箕子は本來、周の武王によつて此に封ぜられたのであるから、國制上更に根本的なる統治の主體を設け、之が後繼者として、半島に號令する必要があつた。茲に於て、高麗末から漸く世人に信ぜられてゐる、朝鮮人全體の始祖としての壇君を利用し、之を祭るに至つたのである。太祖實錄に、

「朝鮮壇君は、東方始めて命を受くるの主にして、箕子は始めて教化を興すの君なり、平壤府をして時を以て祭を致さしむ云云」と記してゐる。斯る徑路を辿つて、壇君の名は、遂に國中に宣傳せられ、その名を聞知しないものはないばかりでなく、朝鮮人の此の智識と信念とを根據として壇君教といふ宗教まで生れた。そして一時は、相應に教

徒を聚め得た程であつたのである。

要するに、壇君傳説の起りは、時代極めて新らしく、傳説が發展するに従つて古傳説的趣味と價值とを著しく減殺するに至つた。されどこの傳説は朝鮮民衆が自覺を喚起した時代に、發展を見たものであることは甚だ味ふべき一事であつて、彼等の自尊心を高める時には壇君の名は、常にその聲を大にせられるのではないかと思はれる。この意味に於て、壇君傳説は輕視せらるべきものではない。

箕子朝鮮と平壤

(一)

李朝の尹斗壽の編に係る平壤誌に、

「平壤に都して壇君と號す、是を前朝鮮となす、周武王商に克ち箕子を朝鮮に封ず、是を後朝鮮となす、四十一代の孫準の時に逮んで、燕人衛滿あり、亡命して黨千餘人を聚め來つて準の地を奪ひ王儉城(平壤)に都す、是を衛滿朝鮮となす、其孫右渠詔を奉ずるを肯ぜず、漢武帝二年、將を遣はして之を討ち、定めて四郡とし、王儉城を以て樂浪郡となす」とある。

上古、平壤を中心として北部朝鮮に業をなすもの、所謂檀君の前朝鮮は暫く措き、彼の箕子の後朝鮮といひ、衛滿の朝鮮といひ、更に又漢の四郡設置といひ、何れも漢種族の半島發展史を繙くに他ならない。惟ふに朝鮮史上に著しき活動の跡を遺せるものに韓民族と扶餘族及び漢種族の三がある。就中、支那は世界文明の淵源地の一として、遠く四千年の歴史を有し、今より凡そ二千二百年前に於て既に開化の頂點に達し、その文化は滔々として四方に流出せられてゐる。古代北朝鮮は、實に此の漢民族の力によりて、開拓せらるゝところが多かつたのである。

(二)

箕子朝鮮を述ぶるに先ち、茲に古代朝鮮の状態について考へて見るに、有史以後、朝鮮半島に現はれたる諸種族の有様を記せるもの、最も據るべきものは魏略と魏志の東夷傳である。魏略は魏人魚豢の著で、魏志は晋の陳壽の著はせるものである。二人共に魏の時に生存したのであるから、頗る信を置くに足るものである。此等について見るに、朝鮮半島西部一帯の地には大體、韓族が居住して幾分漢族を交へて居たのである。

此韓族は半島史の根幹をなす種族で、有史以前から、半島内の最も廣い部分を占め、終に政治上優越の地位を贏ち得て半島を一統し諸民族を同化融合して今日の朝鮮民族を形成するに至つたのである。東部一帯の地は濊貊沃沮の種族之を占め、此等の諸種族の部落的

小國家が存在してゐたのである。濊貊は大體今の江原道の地に住し、沃沮は白頭山と日本海との間の狹長なる地方即ち今の咸鏡南北道の地を占めて居たのである。

此等の種族の間に比較的大なる原始的國家があつたのであるが、西紀前第三世紀頃に存在したものは、朝鮮(古朝)、臨屯、真番、辰國等があつた。其の中、朝鮮、臨屯は北部に屬し、辰國は南部に屬するのである。此の四國の中、朝鮮は位置最も支那に近く、隨つて其の名も早く支那に知られて多くの古書に散見してゐる。所謂古朝鮮と稱するものが之である。

他の三國については、臨屯に江原道の方面にあつた濊貊の國であり、辰國は慶尙北道方面にあつて韓族の國と思はれる。真番の位置は

古來學者間に異説があつて、或は鴨綠江上流域並にその支流なる修佳江流域を含む地方となし、或は忠清道及び全羅北道なりと稱へられてゐる。此等は多少團結せるもので、各酋長あつて干岐又は干と呼び、互に割據の狀を呈してゐたが、その中最も支那と關係をもつものは、大陸に接する北部朝鮮である。

(三)

さて、今より約三千年前に、支那の周の世に殷の箕子が地を朝鮮に避けたりといふは古史の傳ふる處である。所謂箕子朝鮮とはこれである。箕子は支那殷の宗室であつて、紂王の太師となり、孔子によつて三仁の一と呼ばれ、支那人の理想的聖賢として尊崇する人物である。

此の人は箕國に封ぜられて子爵たりし故、普通に箕子と稱するので箕子は其の姓名ではない。其の姓は子といひ、其の名は胥餘とも記され、須臾と記されてある。

紂王は有名なる暴君であつた。王の淫佚日に甚だしく嘗て、その象箸を作るを見て、箕子は「王求足欲天下殆哉」と諫言した事があつた程で、屢諫ひれども聽かれず遂に佯狂して奴となつた。西紀前一二二一年周の武王は、兵を擧げて紂王を攻め亡ぼし、周の天下となるや、伯夷、叔齊が首陽山に餓死せると同じく、箕子も亦周の粟を食ふを欲せずして衆五千を率ゐて、周を去つて遠方塞外に奔り朝鮮の地に來つて建國したのである。

此の事が記録せられたる最古の文獻は、史記の宋世家（漢の司馬遷著）で、今

より約二千年前のものである。

「武王既に殷に克ち、箕子を訪問す。……是に於て武王乃ち箕子を朝鮮に封じて臣とせざるなり。其の後、箕子周に朝す。故の殷墟を過ぎ、宮室毀壞し禾黍を生ずるに感ず。箕子之を傷み、哭せんと欲すれば、即ち不可なり。泣かんと欲すれども、其の婦人に近きが爲に、乃ち麥秀の詩を作る云云」とある。

また、後漢書東夷傳（宋の范曄撰）には

「昔武王箕子を朝鮮に封ず、箕子教ふるに禮義田蠶を以てす云云」とある。

之によれば共に、箕子が周の武王より朝鮮の地に封ぜられたものとして取扱はれてゐる。而し乍ら、史實に徴するに、朝鮮は武王の勢力

四六
 圏内の土地ではない。されば、之に封じ得べき理由がなく、又忠義なる箕子が宗國の滅亡せしに間もなく、武王の封を受けたりとは考へ難いことである。

後漢書の論贊には

「昔箕子は衰殷の運に違ひ、地を朝鮮に避く云云」と述べてゐる。

これこそ穩當の解釋といふべく、殷の滅亡後、箕子は國人五千餘人を率ゐ、支那を脱して、朝鮮に入り、其地に王となりしに、後、周の武王は之に封冊を加へて平和の關係を結びしものなるべく、ざるを支那の歴史家は、例の筆法にて「武王封箕子于朝鮮」など書けるものであらふ。かゝる例は支那の歴史には稀ではないのである。

(四)

右の如く、箕子開國傳説は非常に古いのであるが、之を以て直ちに箕子の渡鮮説を眞なりとすることは出来ない。何となれば、箕子が半島朝鮮に入つたことを立證すべき記録も物件も存しないからである。即ち殷亡びて、漢の起るに至るまで、實に九百餘年であるが、此の間に於ける文獻中、一も箕子の渡鮮を記したものが無いのである。且つ注意すべきは、箕子が國號を朝鮮と稱したのではなく、朝鮮として知られた地方に國したのである。然らば、此處に朝鮮とあるは、果して何處を指したのかといふに、此の朝鮮は餘程範圍の廣いもので、半島の北部と奉天省の南部を含む一帯にて、遼河の流れも之に入りしもので、箕子の來り住せしは半島に非ずして、恐らくは、遼陽を中心とせる遼東地方ならんと推察せられる。而して朝鮮は古く列陽とも呼ば

れしことがあるので、其の位置は、大同江の古名たる列水をも含みたるは勿論にて、平安南道の地が、箕子の領土として密接の關係を有して居たことは言までもないのである。

(五)

是より後、數百年間、箕子の子孫はいかなる状態であつたかといふに、その子孫は四十一代繼續せるが如く説けるものがある。而し乍ら之に對しては、世に異説があるのであつて、支那の根本史料には僅かに、君主の名は否及び準があるのみなのである。

箕子朝鮮最後の王、準を箕子より四十餘世としたのは、陳壽の三國志及び裴松之の三國志解である。在來行はれし箕子の傳は、多く此等

の書に據れるもので、恐らく、其の當時支那での言ひ傳へを記したものであらふ。然るに朝鮮では、之を四十一代と斷定し、甚だしきは各王の諡諱竝に在位年數まで明記したものがあつたが、此等は深く信を置く能はざるもので、後世箕子を尊崇する念の篤くなるにつれて、作爲された事柄である。

箕子尊崇の念は時代によつて異なつて居るが高、勾麗の代には、箕子を箕子神として神に祭つてゐる事實がある。王氏高麗朝に至つては、つとめて支那風を摸したる上に、契丹、金の壓抑を蒙り、半島が漢族以外の種族に服屬してより、反撥的に益々中華を慕ふの念が強くなり、箕子は周の武王に封ぜられたるもの、即ち正統の天子たる武王より封ぜられたる正統の王なりとして、理想の君主と信じたのである。

肅宗七年に箕子の墳墓を營み、之を祭つたのも此の思想から來たものと思はれる。

五〇

降つて李朝に至り、太祖李成桂が高麗に代り建國の業を創むるや、先づ明國に奏請して、朝鮮なる國號を受けたが、其の時、明の天子の詔に

「東夷(朝鮮)の號、惟朝鮮の稱、美にして且つ其の來ること遠し、其の名を本として、而して之を祖とし、天を體し民を牧し、永く後嗣を昌ならしむべし、此を欽べ」とある。此の詔に對して、鄭道傳(太祖創業の功臣)は

「蓋し、武王の箕子に命ずるところのものを以て、殿下(李太祖をいふ)に命ず、名既に正しく、言既に順ふ。……今既に朝鮮の美號を襲ふ、則ち箕子の善政亦常に講ずべき所にあり」(朝鮮國典)といひ、更に李太祖が明

の朝廷に奉つた奉文中に自己の先系を述べて

「臣の先世は本、朝鮮の遺種なり、臣の二十二代の祖、翰(穆祖)に至つて、新羅に仕ふ」といつて居る。之れ朝鮮の遺種を以て國を建て、正統なる箕子朝鮮の後繼者たることを告白するものである。

文祿の役に日本に破られざりしは、正統の國なるが故なりとて、藩邦再造の恩といひ、明の恩を感謝し、箕子の尊崇益々深きを加へてゐる。この氣運に投じて、遂には西紀一六一一年、鮮于韓、奇等といふもの自ら箕子の子孫なりと稱し、神官となりて、その祭祀に任ずるに至つたのである。其の後西紀一七七六年には、徐命膺は箕子外記を作つて、箕子傳を記し、また今より百餘年前には、奇氏某が庭中の石箱より、箕子以來の系圖を發見せりと吹聴するに至つた。此の事が恰も事實の

五一

如く傳へられ、遂には哀王準に至る迄の四十一代、九百餘年の年代記が巧に列記せらるゝことゝなつたのである。降つて明治十一年には、儒子が再度、箕子志を編むたのであるが、之には系圖の他、肖像及び文字の偽作さへ載せられてゐるのは、寔に奇怪である。かくの如くにして、偽傳は更に偽傳を生み、其の纏、年表等にも出づるに至つたもので、箕子の朝鮮系圖は全然牽強附會の説である。

(六)

現今、牡丹臺下の松樹の間に、箕子陵がある。箕子陵は、もと墓と稱して居たものであるが、今から約八百餘年前高麗肅宗の七年に創立せられたもので、李朝成宗十二年に碑を立て文を刻して益々信仰を深

ふせるものである。また、箕子に縁故のあるものとして箕子の井田と稱するものが残されてある。これに關しては異説多く、高勾麗時代の町の道筋の跡であらふといふ説などがある。また、箕子の築造に係ると傳ふる箕子井が、平壤停車場前にある。嘗ては、高勾麗東明王、之を飲用せしことありと傳へられ、靈水と稱して今尚ほ存してゐるのである。

衛滿朝鮮と平壤

(一)

紀元前第三世紀の半頃、支那本土は、秦の統一するところとなつた。箕子第四十世の孫と稱する朝鮮王否は、秦の威を畏れて、略之に服屬したのである。即ち秦は鴨綠江を越えて義州、龍川の地方をも取り、其の南に障塞を築いて朝鮮との境とした。王否の死するや、準之に代つて立つたのであるが、二十餘年にして、秦は勢を失ひ、天下は麻の如く亂れた。この兵亂のために、支那本土は紛亂を極め、燕、趙、齊等の流民の亡命するもの漸く多く、山東より平安南道の海岸に盛んに流れ込む

有様であつた。蓋し、此等は兵亂を恐るる臆病者か、若しくは無頼漢であつた。準は此等流民の徒を西界の地に置いて居住せしめたのである。其の後、漢の高祖一統の業を了へ、盧縮を以て燕王に封ずるや、燕と朝鮮とは涓水を界として相對峙するに至つた。涓水は鴨綠江又は大同江等の古名であるが、此處では清川江を指すのである。

漢高祖の末年、燕王盧縮が漢に反して匈奴に入り、燕國遂に滅亡するや、其の國人衛滿なるもの亡命して千餘人の黨を聚め、涓水を渡つて朝鮮の境域内に入り込み、西界に居て朝鮮の藩屏たらんことを請ふたのである。王準は之を許したるのみならず、頗る信寵し、拜して博士とし、以て西邊を守らしめた。

茲に於て、衛滿は秦末の亂によりて、曩に半島の西部に移住し來り

たる支那人を統制して勢を蓄へ、附近の種族をも服屬せしむるに至つた。既にして衛滿は、機を窺ひ詐つて人を遣はして、王準に、漢兵十道より攻め來ると告げ、入つて、宿衛せんことを求め、急に之を襲ひて、之を逐ひ代つて朝鮮王となり、王儉即ち平壤に都したのである。恰も漢の惠帝の時、西紀前一九〇年頃、我が孝元天皇の朝である。所謂箕子朝鮮は、茲に於て亡んだのである。

王準は國を奪はれ、左右宮人を率ゐて、韓地に逃れ、自ら韓王と稱した。朝鮮史籍では之を馬韓國と稱してゐる。斯くて久しき年月を経て、箕準の子孫は、いつしか全く絶え果てたと見え、李氏朝鮮の時、大に箕子を尊崇し、世宗王は其の後裔を求めて箕子廟に奉祀せしめんとしたが、眞正の子孫を得ることが出来なかつたといふ。

(二)

衛滿の朝鮮王となつた頃は、支那本土に於ては、漢の國家尙鞏固ならざりしため、漢は遼東の太守をして衛滿と約して、外臣たらしめ、塞外の諸種族の邊境に入寇することを防いだのである。又同時に諸種族の漢に入朝するものを妨ぐことなからしめやうとしたのであつた。是に於て、衛滿は益々勢力を逞くし、周圍の種族を脅かし、或は利を以て誘ひ、臨屯、眞番等の諸國を歸服せしめるに至つたのである。元來衛滿は漢の亡人を中堅として其の力に依つて國を建てたもので、後漢民族の移住するもの多きを加ふるに至り益強盛になつたのである。其の勢力範圍も、大同江流域を中心として東は日本海、南は漢江以

南にも及んだのである。

衛滿の孫右渠の王となるや、漢の亡命者を誘致する事益々多く、のみならず眞番、辰國等の漢に通ぜんとするものを阻抑するを常とした。是に於て英邁なる漢の武帝は使を遣はして、諭さしめしも、右渠之を聽かず、却つてその使者を殺したのである。

されば、愈々武帝は朝鮮征討の師を上ぐるに決し、海陸の二軍を以て大舉して、國都王儉を攻めしめたのである。偶々漢軍に不和を生じて、戦況振はず、右渠も堅く守つて容易に屈せざりしが、渠の臣、相參なるもの右渠を殺して漢に降りしより、局面一變して遂に衛滿朝鮮は滅亡するに至つたのである。

實に西紀前百八年、漢の元封三年の事で、我朝の開化天皇五十年で

ある。

斯くて武帝は、茲に樂浪郡、臨屯郡、玄菟郡、眞番郡の四郡を置いて此地を分治せしむることゝしたのである。

樂浪時代の遺物



漢鏡



瓦當



封泥



帶金具



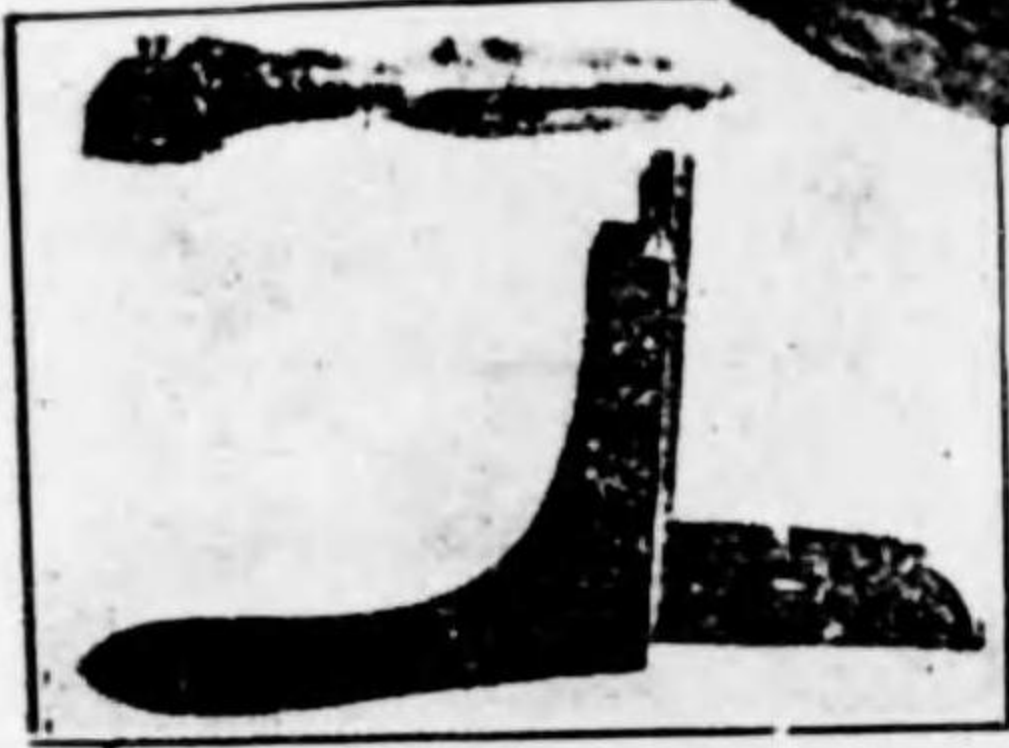
博山爐



罎

樂浪時代の遺物

孝文廟銅鐘（船橋里出土）



奈
戈



大 同 江 面 的 古 墳

古墳に使用せられたる磚の細面



樂浪古墳（側室入口）



高句麗時代の壁画

江西 馮野中墓 東壁 龍形圖



江西 馮野中墓 北壁 玄武圖





瓦
當



樂
浪
時
代
の
遺
物





瓦
當



高
句
麗
時
代
の
遺
物

樂浪時代と平壤

(一)

樂浪時代と平壤

支那が、春秋戰國の世に於て、常に脅威を感じたものは、北方民族の所謂匈奴であつた。されば漢の武帝は、國土の安固を圖るために、北方民族と一大決戦をなすの必要があつたのである。その時に際して、常に武帝に不安の念を抱かしめたものは、側面にある衛滿の朝鮮で、即ち側面攻撃をうくるの恐れがあつたからである。且つ又一面には、漢種族の獨立國が、支那本土以外の地に存在せることは、雄志を抱く武帝の漢族統一の理想上、忍び難い處であつたに相違ない。

然るに、衛滿朝鮮は、衛滿以來漢の朝廷に入朝したことがない。その上眞番、辰國等の諸國の漢に通ぜんとするものを、阻抑するを常としたのである。

二

是に於て、武帝は元封二年使者を遣はして諭す處があつたが、聽き入れないのみか、却つて、その使者を殺したのである。

されば、武帝は、愈々朝鮮征討の師を上ぐるに決し、水陸二軍を出して、大舉朝鮮を攻めしめたのである。即ち樓船將軍楊僕は、山東より海路を進み、列口(大同江口)に入り、左將軍荀彘は、遼東より陸路をとつて共に王儉城に迫つた。偶々、漢の二將間に不和を生じて、戦況振はず、右渠も堅く守つて容易に屈せざること數ヶ月に及んだ。武帝は更に將を遣はして、軍を督せしめられたれば、漢の兩軍王儉城を攻めること急で

あつた。是に於て朝鮮の將相中、私かに漢軍に降るもの續出し、相參なるもの、遂に王右渠を殺して降るに至つたのである。

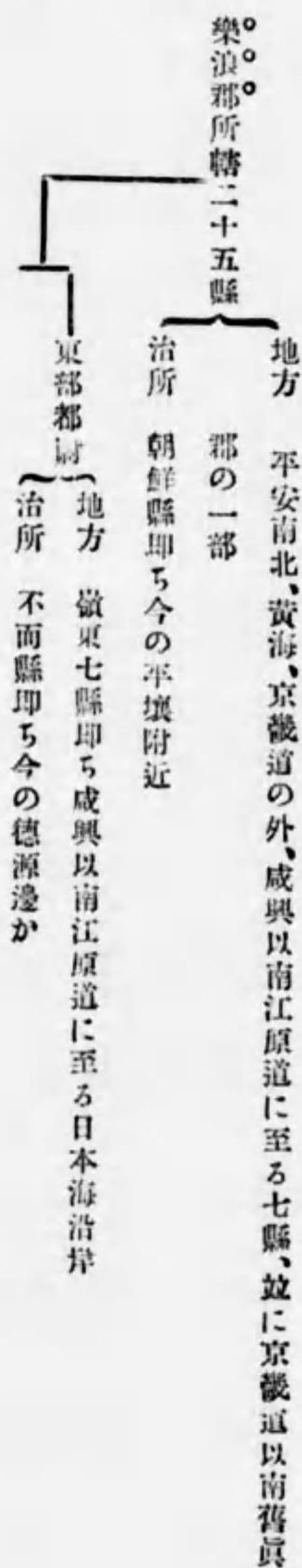
斯くの如くにして、朝鮮は全く漢のために滅されたのである。恰も武帝の元封三年、(西紀前、百八年)我が朝、開化天皇五十年の事で、今より約二千年前である。衛滿朝鮮は國を保つこと、僅かに三代八十餘年に過ぎなかつた。

(二)

漢の武帝は、衛滿朝鮮を滅ぼして、其の地、並に附近の諸小國を併せ漢の直轄領土となし、之に樂浪、臨屯、玄菟、眞番の四郡を置き、更に之を縣に區分し、所謂郡縣の制度を布いて統治したのである。

その各郡の境域は、大體において樂浪郡は今の平安南北道、黄海、京畿の四道に當り、臨屯郡は今の江原道と咸鏡南道の一部を占め、玄菟郡は咸鏡南道の大部を包むこととなる。唯、眞番郡の位置については古來異説があるが、大略、南方説と北方説とに分る。北方説においては、鴨綠江畔に於ける高句麗族の住地、即ち同江上流域並に同江の支流なる佟佳江流域を含む地方とするのである。之に對して南方説は忠清道及び全羅北道に當ると力説する處のものである。

この四郡制は、其の後、濊貊及び韓族の反抗侵迫に堪えずして、僅か二十七年にして廢せられ、昭帝の始元五年には、郡を廢合して、玄菟、樂浪の二郡に改められた。而も、玄菟郡は、滿洲に移して其の疆域を縮少し、鴨綠江方面の僅か三郡を管轄として、其の名をとゞめたに過ぎなかつた。



〔南部都尉〕
 地方 恐らく漢江流域地方以南若干縣
 治所 昭明縣即ち今の京城又は廣州か或は開城か

(三)

樂浪郡は、四郡の内、最も重要なるもので、しかも我が平壤は其の郡治の所在地として、繼續約四百二十年間、政務の中心となりし處で、その住民は、主として、衛滿朝鮮よりの漢民族であつた。

惟ふに、大陸の半島に及ぶ力は、横波であつて強いものではない。而して統治の難易は、支那人の多寡によることが勿論であつて、當時の實力は、濃度の密なる平壤附近が、最大であつたのである。漢書の地理志には、樂浪郡の漢人の數を擧げて、六萬二千八百十二戸、四十萬六千

七百四十人とある。昔時は、税を隠さんがために報告を偽ることが多かつたので、これとても實數よりは少いと想はれるが、而も夥しい數で實に支那本土の一部の如き壯觀を呈してゐたのである。

且つまた樂浪郡には、太守縣令に著名なる人物が居た關係もあつて、半島の一角に有勢なる地盤を作り、昭帝の緊縮主義を取りし際に於ても、此のみは依然として存立し、長く支那の版圖として殘されたのである。當時の支那人は所謂新開地の住民で、皆土豪となつて勢威を振ひ、文化に奢りたる狀は、墳墓中よりの發掘品によつて、想像するに難くないのである。

(四)

始元五年、四郡を廢合して二郡としてより百十二年を経て、後漢光武帝の代となつた。帝は彼の王莽の亂を平げ、漢室を再興せしが、専ら内を治めて、外に力を用ゐざる方策を取つたため、同帝の建武六年に至つて、曩に樂浪郡に置かれた東部都尉、南部都尉は共に廢せられたのである。即ち南部都尉の管轄した諸縣は、郡の直轄となつたが、東部都尉の支配した嶺東七縣の地は之を放棄し、悉く濊貊の渠師を封じて、縣侯とし自治を許し、互に相攻伐するに委せたのである。これより郡の所轄縣數は、減じて十八縣となつた。斯くて百七十餘年間、此の狀態を持續して、後漢の末に及んだのである。

樂浪郡の所轄せる縣を表示すれば、

元封三年	始元五年以降(前漢書地理志所載)	建武六年以降(後漢書郡國志所載)
縣數不明	(縣二十五)、朝鮮、講郡、浪水、含資、黏蟬、遂成、增地、帶方、靺婁、海冥、列口、長岑、屯有、昭明 (南部都尉治)、饒方、提奚、渾彌、吞列、東曠、不而 (東部都尉治)、蠶台、華麗、邪頭昧、前莫、夫租、天祖か)	(縣十八)、朝鮮、講郡、浪水、含資、占蟬、遂成、增地、帶方、靺婁、海冥、列口、長岑、屯有、昭明、饒方、提奚、渾彌、樂都
縣名		

後漢の末に至つて、遼東太守に公孫度といふものがあつた。漢の威力漸く衰頹せるに乗じて自立し、獻帝の時には、樂浪玄菟の二郡をも統制するに至つたのである。

此の頃、鴨綠江畔に一の強族が現はれた。高句麗、即ちそれである。高句麗はもと玄菟郡に屬する一縣であつたが、漸く勢を張り後ついに一の王國となつて獨立するに至つた。且つ又、南方の韓、東方の濊も相次いで強勢となり、漢の郡縣は此等を制するの力なく、殊に黃海道にありし屯有縣以南の地は、全く荒廢するに任せたのである。此に於て公孫度の子、公孫康は衰勢の挽回策として、獻帝の建安年中、屯有縣以南の荒地を分けて新に一郡を設置し、之を帶方郡と稱し、遺民を收集し兵を興して韓濊を伐たしめたのである。これ今より約一千七百年前のことである。

この帶方郡の治所は、始めは多分帶方縣で、帶水即ち今の漢江の下流地方に在つたものと思はれる。されど、第三、四世紀の交、百濟が都を

漢山(京畿道廣州)に奠めし頃には、既に其の郡治は、黃海道鳳山郡附近に移されたのである。

(五)

支那本土に於ては、獻帝の建安の末頃より分れて、魏、吳、蜀鼎立の姿となり、所謂三國時代となつたのであるが、就中、魏は洛陽に都して、支那の北部を領し、餘勢は延びて遼東の公孫氏を滅し、更に朝鮮半島内の二郡をも統制することとなり、其威名は、韓竝に倭人間にも聞ゆるに至つたのである。降つて、西紀三世紀の後半、晋の司馬氏が、魏に代つたのであるが、其の勢は塞外までは及ばなかつた。これより所謂北方民族侵略時代に入るのであつて、塞外民族は次第に強勢となつて南

侵し、爲めに支那の主體は、南方退却を餘儀なくされた。

此機に乗じて、一時は魏將母丘儉のために撃たれて亡びんとせし高句麗は、再び擡頭し來つて玄菟郡を屠り、樂浪郡の北部に侵寇を逞ふするに至つたのである。

斯くの如くにして、漢族の勢威漸く半島に衰へたのであるが、その最後の幕をなすものは、遼東の張統なるものであつた。彼は來つて樂浪、帶方、二郡の地に據り、高句麗の美川王と相攻め相戦ふたのである。茲に數年ならずして同王十四年、遂に其の地を放棄したのである。茲に漢の武帝以來の郡縣の名殘も全く半島の地から消滅し去つたのである。これ今を距る約千六百年前である。

要するに、世界の優勝民族として誇りし漢族も、文化中毒によりて

次第は衰運に傾きたるに乗じて、新らしき血に支那の文化を受け入れたる高句麗、言ひ換ふれば身體は野蕃人にして、頭は開化人たる高句麗が、之に代つて北朝鮮に勃興し來つたのである。

これ晋の建興元年(西紀三一三)恰も我朝の仁徳天皇の元年に當る。支那郡縣の半島に存續せし事實に四百二十一年にして亡んだのである。

(六)

漢の武帝の樂浪郡設置以來繼續約四百二十年間政務の中心として、最も重要な意義をもつた樂浪郡治の置かれしは、我が平壤である。

其の遺蹟を尋ぬるに、大同江鐵橋より約半里下流の大同江左岸の

土城は、實にその郡治の址で、東西約六町半、南北約五町半の地域を土築の城壁を以て圍んでゐる。其の内外より發見される漢代の瓦當の中には「樂浪禮官」「大晋元康」「千秋萬歲」或は「官」等の文字のあるものがあり、嘗ては「樂浪太守章」「譚邯長印」の文字を刻める封泥も出て、又漢魏時代に屬する磚が多數に發見せられてゐるのである。且つ其の附近には無數の古墳群がある。其の地形や墳墓が適當の距離に存在せる事や、又他地方と同一形式で、而もその規模の大なる事や、且つ其の發掘品より論證して、今や樂浪郡治の遺址なる事が明白に斷定さるゝに至つたのである。

この郡治址を圍む古墳の數は夥しく、大同江面、龍淵面、南串面の三箇面、十四ヶ里に亘り、一千百三十基と算せらる。その様式には二様あ

つて、四方の壁及び天井床を厚板を以て箱様に造つた木櫛か、若しくは玄室の壁を、磚を以て構造した磚櫛かである。此等の古墳に埋藏せられたる副葬品は、實に驚嘆すべきもので、當時の藝術の進歩を語る好箇の資料として、吾人の感興を唆るものが多いのである。此等の遺物を分類すれば。

一、銅器——博山爐、鏡、簪、携蓋鼎、壺、洗、車軸頭、虎鎮鏡、銅印等

何れも形態完好、手法精美、往々獸首又は禽獸の文様を飾り、鍍金を施してゐる。出土の分明せる此等の銅器によつて、初めて漢代銅器の學術的研究が遂げらるゝに至つたのである。

二、陶器——甕、壺、案、甗、甗等

厚手と薄手の二種類があつて、厚手の者は、其の質厚くして砂を

混じり、灰白色を呈してゐる。薄手のものは、其の質薄く緻密にして灰黒色である。往々朱又は緑釉、黄褐釉を施した者が發見される。此時代に既に釉樂の發見ありしことは著しき事である。

三、漆器——案、盤、杯、函等

支那の記録には、漆器が既に漢時代に行はれてゐたことが出てゐるが、遺物の全きものは、未だ嘗て世に發表されてゐない。然るに此の樂浪古墳より、漢晋時代の漆器の發達を窺ひ得るものが採集されたことは、特筆すべきである。

四、武器——刀、劍、戈、槍、斧、弩機、鐵、刀子等

五、馬具——轡、銅面、革帶金具等

六、布帛——麻布、絹類

古墳より發掘された銅器に錆りついたり、漆器の地に用ゐられたり、粘土中に腐朽のまゝ、その形跡が見えたりして、綾羅錦繡の技を窺ふ事が出来る。

七、金屬服飾品——指輪、釧、帶鉤、櫛、其他飾金具

八、玉石器——璧、珮、鼻塞、玉豕、玉印、磨盤、及び種々佩飾珠玉類

九、錢——半兩、五銖、貨泉

等である。以上は大同江左岸の土城について述べたのであるが、最近に於て驚くべき資料が、平壤の對岸船橋里より採拾せられた。それは、漢の孝文廟銅鍾である。銘識には、

孝文廟銅鍾容十斤

重卅七斤(四十七斤ト讀ム)

永光三年六月造

とあつて、文字極めて鮮かである。永光三年は、今より凡そ千九百六十五年以前である。船橋里停車場の北から出土したものであるが、偶然の機會に世に出たものである。此の地方からは嘗て漢鏡や鼎が発見されたことがあり、而も新たに有力なる一資料を提供されたことに依つて、史學界には極めて重視されてゐるのである。(平壤中學校藏)

なほ、樂浪時代の重要な遺物としては、龍岡郡海雲面龍井里にて発見された古碑がある。高さ五尺、幅三尺六寸、厚さ四寸の自然石の一面を磨して、文を刻したもので、その碑文の中に見ゆる粘蟬の文字並に書體等により、樂浪郡の内の粘蟬縣の故地であることが明らかにせられた。その附近にも、いくつかの古墳の散列するものがある。

高句麗時代と平壤

(一)

高句麗は、今の滿洲の長春、吉林より哈爾濱方面に居住してゐた夫餘族の別部である。夫餘族は、匈奴の盛なる時、之に逐はれて原住地を去つて、諸方に部落を立て、沃沮となり濊貊となつたのであるが、就中高句麗の始祖朱蒙(東明王)は卒本に現はれ來つて、漢の高句麗城内に建國したものである。故に號して、高句麗といひ、高を以てその氏としたのである。これ西紀前三七年、前漢の建昭二年のことで、漢の四郡を置いた元封三年よりは、七十年後のことである。

その都とした卒本の位置は、鴨綠江の支流なる修佳江の上流であつて、始めは、漢に服屬して玄菟郡に入つて居た地である。高句麗は、第六太祖王宮の頃より、益々強大となり、數代を経て、都は更に鴨綠江畔に移された。丸都(又は國內城)と呼ぶものが、それであつて、滿洲の盛京省輯安縣通溝地方に其の遺蹟が存する。

高句麗が漸く發展の氣運に向つた時、偶々漢の遼東郡太守公孫氏は、遼東に自立して、朝鮮の樂浪帶方二郡の地を領有してゐたので、高句麗は、力を此の方面に伸ぶること能はざるを知つて、方面を變へて鴨綠江の上流地方より東方に進展し、更に日本海に沿ふて南方にその勢力を延べ、咸鏡道の沃沮、江原道の濊を服屬し、更に辰韓とも接觸することとなつた。

其の後、支那には魏國が起つて公孫氏を滅し、樂浪帶方二郡の地を攻め、盛んに四方を侵伐したのである。高句麗も、之がために非常に苦しめられ、魏將母丘儉に收められたときは、首府の丸都を陥れられ、國まさに滅びんとしたのである。

幸にも、強敵魏國は、久しからずして滅び、晉が支那の天下を一統したのであるが、此の國は勢ひ微弱で、外には力を延ばし得なかつた。この隙に乗じて高句麗は、漸次鴨綠江以北の地及び樂浪帶方二郡の地を蠶食したのである。

此の頃、遼東に國を建てた燕のために屢々攻撃を蒙りながらも、高句麗は半島の侵略を止めず、第十五美川王の十四年(西紀三三三)に至つて終に、樂浪帶方二郡を併呑したのである。漢の武帝の設けたる郡縣は

こゝに全く半島にその跡を絶つたのである。恰も我朝仁德天皇元年で、今より約千六百年前である。

尋いで高句麗第十九廣開土王の立つや、益々四方を攻略したのであるが、殊に百濟を攻むる事厳しく、その數多の城を取つて、降を請はしめ國威大いに上る。新羅はその勢威を畏れ、永く日本に服従せしにも拘らず彼に質を送つて服従した。されば我が軍は大いに新羅を討ち、且つ又百濟を援けて廣開土王と兵を交へ、進んで平壤までも迫つたのである。廣開土王在位二十二年にして、其の子長壽王、後を襲ふて立ち、その在位七十九年の長きに亘つて益々國威を張つたのである。

(二)

長壽王の位を繼いだのは、我が允恭天皇の朝で、支那は恰も南北朝時代である。

高句麗は、當時既に一大強國となつてゐたのであるが、後顧の憂を除くため、江南の東晋の封冊を受けたのみならず、北魏にも使節を送つて、大陸との關係を圓滑ならしめ、一意半島の經營に従つた。

而して國都を鴨綠江沿岸の國內城より、半島經營に至便の地たるわが平壤に遷したのである。恰も長壽王十五年(西紀四二七)で、今を距る約千五百年前である。その都城を設けた地域は、今の平壤の東北約四里なる安鶴宮址及び大城山城と假定されてゐる。

かくて半島の侵略は一日も緩めず、同王五十二年には新羅を攻撃して、之を滅亡せんとしたが、日本の將軍膳臣斑鳩の救援軍のために

その志を果さなかつた。其の後王は百濟の攻略を企て、親ら兵を率ゐて、國都漢城を圍み、王を捕へて斬り城を陥れた。この時諸將は百濟を不定せんと勸めしも、聰明なる王は日本を憚りて敢てその舉に出でなかつた。廣開土王、長壽王の二王は英主で相繼いで専ら經略を事としたに拘らず、諸韓族の國が、幸にその吞噬を免がれたのは、一に日本の援助に依れるものであつたことは特記すべきである。

當時の疆域は、西は遼河、北は松花江方面に延び、東は豆滿江流域より江原道江陵附近に及び、南は忠清道の大部を含む地帯であつて、實に滿洲より朝鮮半島に跨れる大國であつた。此の一大國の都としての當時の平壤の盛況は想像に餘りがある。

(三)

支那本土は後漢の亡びてより後數百年間、分裂の状態を續けたのであつたが、隋起つて天下を一統するや、高句麗、百濟、新羅は相繼いで使を遣はし何れも隋の臣と稱して、その封冊を受けた。即ち隋の文帝は高句麗王を遼東王に拜したのである。然るに高句麗の服屬は、表面のみであつて、内には兵を蓄へ穀を積みて防守の計を怠らなかつた。かくて第二十六世嬰陽王は靺鞨人萬餘を率ゐて隋の遼西地方を侵したのである。裏切られたる文帝は、大いに怒つて直ちにその官爵を削り、漢王涼を將として水陸三十萬の兵を以て、遠征を企てたが、餽運繼かず、のみならず饑疫軍中に起つて、遂に効なく空しく還つた。

煬帝繼いで立つや、大業七年、更に詔を發して大舉之を討たんとした。その準備は辛烈なものであつた。帝は龍舟に御し自ら出で、幽州總管に勅して船を造らしめ、官吏は、また役を督して、晝夜水中に立ち敢て息まず、腰より以下皆蛆を生じ死するもの十に三四とある。又河南、淮南、江南に勅して戎車五萬乘を造らしめ、而して江淮以南の民及び船は、諸倉米を運ぶに軸艦千里往還常に數十萬人といふ騒ぎであつた。以て當時の盛觀が想見される。

斯くて、帝親ら軍を率ゐて高勾麗を討つたのである。諸軍は道を分つて進み、左十二軍は鏤方、樂浪等の道を取り、右十二軍は黏蟬、襄平等の道よりして何れも平壤に向つたのである。凡て一百十三萬人、餽者之に倍すとある。大業八年、諸軍遼河を渡り、至る處に高勾麗を敗つた

一方、來護兒將軍は、江淮の水軍を帥ゐて海道より半島に至り、平壤を去る六十里の地にて、高勾麗兵を破り、勝に乗じて、平壤城に入らんとしたが、伏に遇つて大敗した。

宇文述、于仲文等九人は、分れて諸道より進み、鴨綠江西に會して、人馬共に百日の糧を與へたが、重くして能く勝ふるものがない。即ち宇文述は嚴命を下して、米麥を遺棄するものは斬すと傳へたので、士卒は幕中に坑を堀つて之を埋めた。されば纔かに路半ばにして、糧食が盡きるといふ有様であつた。

高勾麗王は大臣乙支文德を敵の營に遣はして詐つて降り、その虚實を窺はしめた。隋將は、文德を捕へんとして果さず、江を渡つて追従した。文德は、殊更敵を疲らさんために、戦ふ毎に走つたのである。隋軍

一日中に七戦して悉く捷つて、遂に薩水江を渡り、平壤を去る三十里の處に至つて營を構へた。

文徳は復々、使を送つて詐つて降らんことを傳へて曰く「若し師を施さば、當に主を奉じて行在に朝すべし」と。隋の將卒は、已に疲弊してゐた時である。加ふるに平壤城の險固にして容易に抜くべからざるを見て、乃ち退軍し始めた。かくて隋軍の薩水に至つて、軍の半ば渡るを見すまして、文徳は急に隋の後軍を猛襲したので、敵の諸軍は此の奇計にもろくも潰えて、散亂し一晝夜にして鴨綠江に逃げて還つた。始め隋軍の遼東に至るや、九軍三十萬五千と稱したのであるが、その還るに及んでは、僅かに二千七百人であつたといふ。敗戦の狀は寔に慘たるものであつた。

安州の七佛寺は、此の戦に七佛現はれて高句麗軍を加護されたといふ口碑によつて建てられた古刹である。

煬帝はこの敗戦にも懲りず、再び親征したけれども、遼東まで至つて、空しく師を班した。その後、久しからずして、榮留王第二十七世元年終に隋は滅亡したのである。この高句麗遠征の舉は、成敗の如何に關せず既に天下騷擾の因をなしたのであるが、しかも目的を達するを得ず再三敗戦せしことは、隋滅亡の大因をなしたことは言ふ迄もない。

(四)

隋亡んで唐の代となるや、高句麗王は使を遣はして朝貢し、且つ子弟を送つて唐の國學に入らしめ、つとめて和親の策を講じた。新羅百

濟の二國を相次いで入朝した。

此の頃高句麗の權臣に、泉蓋蘇文といふものがあつた。性凶暴にして、不法の行ひが多かつたので、王及び大臣は相議して之を誅せんと計つたが事ならず、却て彼は兵を動かして、盡く大臣を殺戮したのみならず、彼は王宮に侵入して、手づから其の君榮留王を弑し、王弟の子寶藏王^{二十八世}を擁立し、逆臣自ら、莫離支^{王を擁して文武の權を有するもの}となつて、遠近に號令し、専ら國事を制するやうになつた。而して彼は百濟と聯合して、大いに新羅を苦しめ、その唐に入朝する路を、斷たんとしたので、新羅王は急を唐に告げて救を求めた。

唐の太宗は三國に諭して、兵を停めんとしたが、獨り高句麗は之を聽かないのみか、却つて唐の使者を拘束したのである。太宗は大いに

怒つて、蓋蘇文の罪を彈じ、その君王を弑し、民を殘虐し、いま又唐の命に背くを責めて、討伐の意を決したのである。即ち賢相、房玄齡を國に留めて守らしめ、名將、李勣、張亮を行軍大總管に任じ、大軍を發して高句麗を親征したのである。

唐の貞觀十八年十一月、張亮は水軍を率ゐ、李勣は陸軍を督して先づ進んだのである。^{翌年大化元年}李勣は、師を潜めて遼水を渡り、遼東の諸城を降した。帝も亦遼水を渡つて、遼東城を屠り、安市城^{今の蓋平を圍縣の東北}を圍んだ。この時高句麗兵十五萬の來援があつたけれども、脆くも破れ、唐軍將に半島に突入して、一舉にして國都平壤を衝かんとする勢であつたが、安市城の圍みは、容易に抜けなかつた。圍みを受くること八十日に及ぶも、死守して屈せない。唐の兵を用ふるに五十萬なほ且

つ效がなかつたのである。處はこれ滿洲の天地である。寒氣既に襲ふて、草枯れ水凍り、兵馬久しく留り難く、加ふるに糧食まさに盡きんとする状態であつたので詮、方なく師を班したのである。其の後も、屢々將を派して攻めたけれど功がなかつた。

之より百濟は高句麗の援護を待んで、新羅を侵すことが頻りであつた。その新羅の乞を容れて、唐はまづ百濟を定めんとし、蘇定方等を遣はして、竟に百濟を滅亡した。(西紀六六〇年)

(五)

唐は百濟を亡すや、直ちに高句麗の平定に着手し、第二回の大遠征を計つたのである。即ち高宗は龍朔元年、諸國に兵を募り、任雅相、契苾

何力、蘇定方等の諸將に軍を督せしめ、三十五軍の大兵を以て水陸道を分つて、並び進ましめた。

一方には新羅の文武王、唐軍の命を奉じ、自ら兵を領して、南川停今利に次し、金庾信等をして糧食を唐軍に輸送せしめたのである。

蘇定方の軍は進んで平壤を圍んだけれど、他の諸軍は一勝一敗、最後の捷を得るに至らず、詔によつて又も退軍を餘儀なくされた。

泉蓋蘇文執政の間は、さすがの唐軍も志を得ることが出来なかつた。寶藏王二十五年に、蓋蘇文死し其の子、男建代つて莫離支となる。

高宗は、この時第三回の遠征を企て、李勣を以て、遼東大總管に任じ征麗軍を督せしめ、また新羅よりも兵を徴したのである。新羅の文武王は命に應じ、金庾信等の將軍を具して、漢城州廣州に出で進んで、樟塞黃海

道途安に至り南北より相夾撃せんとしたのである。唐軍は旗鼓堂々として、鴨綠江まで達したが、高勾麗の男建は必死となつて、江を守つたので渡ること能はず、またも空しく兵を班したのである。

斯くの如く前後數回、南北の大軍を邀へ撃つて、餘命を繋いだ高勾麗も最後の時が來た。即ち寶藏王二十七年、唐の部將薛仁貴の率ゐる軍は滿洲に於ける金山に勝ち、扶餘城を抜き、破竹の勢をもつて進んだので、四十餘城は風を望んで競ふて服を請ふた。この勢に乗じて、難なく鴨綠江を渡り、直ちに進んで平壤を圍んだのである。新羅文武王は三度諸軍を率ゐて漢城に次し、部將を遣はして、唐將李勣に會せしめ共に平壤を圍むこと月餘に及んだ。

男建大いに防戦に力めたが、包圍軍の攻撃愈々厳しく、遂に城を支

ふる能はず、寶藏王及び男建等は皆敵の捕虜となつた。高勾麗は唐と干戈を交へてより、二十四年にして遂に滅亡したのである。始祖朱蒙の國を創めしより、實に二十八世、七百五年を歴、恰も我が朝、天智天皇七年西紀六六八年で、今より約千二百五十年前である。

唐はこの地に、九都督府を設け、其の下には四十二州、百縣を置きて之を治め、高勾麗の舊都たりし我が平壤には、半島を統轄すべき安東都護府を置いて此等を統べしめ、大將軍薛仁貴をもつて安東都護に任じたのである。

(六)

高勾麗の遺物は主として、都城の遺址と陵墓とに遺されてゐる。

都城址よりは、當時の工藝を見るべき古瓦等か多數に發見せられ石悉く瓦なりの觀がある。陵墓は美事なものが多く、その内部玄室の構造裝飾によつて、當時の建築術の一端が窺はれる。又其壁面に施された繪畫には、世界に誇るべきものがあるのである。惜しむらくは、高勾麗滅亡の時、唐兵その陵墓を悉く發いて副葬品を盗み去つたため、當時の工藝品は殆んど残されてゐない。

前に述べた如く、高勾麗が鴨綠江沿岸の國內城から都を遷した當時の平壤は、今の安鶴宮址を中心とせる地方と假定されてゐる。安鶴宮址と稱する處は、方七八町許の地域を土築の城壁をもつて圍み、内に宮址園池址と思はるゝ處があり、また高勾麗時代の巴瓦や唐草瓦や平瓦の破片が無數に發見せらるゝのを見れば、恐らく當時の王宮

址であらふと思はれる。此の宮址の北に、大城山高く聳え、其上には石築の城壁が繞らされてゐる。またこゝからも、當時の古瓦片が發見せらるゝ。此の山城は、敵襲來の際、宮をいで、此處に據守せんがために築城された者である。此の大城山麓、安鶴宮の左右に、千餘の古墳が散在してゐる。又東の方約一里許、低い連山の南麓にも、百數十基の古墳が群在して居る。此等の古墳は、大部分土塚で稀には石塚も混じてゐる。

更に高勾麗の遺蹟として、茲に特筆すべきものがある。それは、江西龍岡地方に多數散在せる古墳である。その所在地を列擧すれば、

- 一、梅山里四神塚(龍岡郡大代面)
- 二、花上里龜神塚(同郡新寧面)
- 三、花上里星塚(同郡同面)
- 四、安城洞大塚(同郡池雲面)

五、安城洞雙楹塚(同郡同面)
七、遇賢里三墓(同郡江西面)

六、肝城里蓮花塚(江西郡普林面)

九八

就中重要なるものは、遇賢里の三墓である。其位置は江西邑の西約三十町の平野の中に相鼎立してゐる。その中、南方に位する者が、最大で大墓と稱せられてゐる。その西北にあるもの大いさ之に亞き、中墓と名づけられてゐる。この二墓の玄室内部から、高勾麗末の精鍊された技術を代表すべき、見事な壁畫が發見されたのである。いま其の大墓について見るに、墳徑約百七十尺、高二十九尺で、石櫛は良質の花崗石の大材を用ひ、構造極めて巧で、手法また精美を極めたものである。玄室内には木棺の台石と思はるゝ二箇の石床が安置せられてゐる。その壁天井には花崗石上に、直ちに彩色を以て、繪畫文様が描かれ、雄

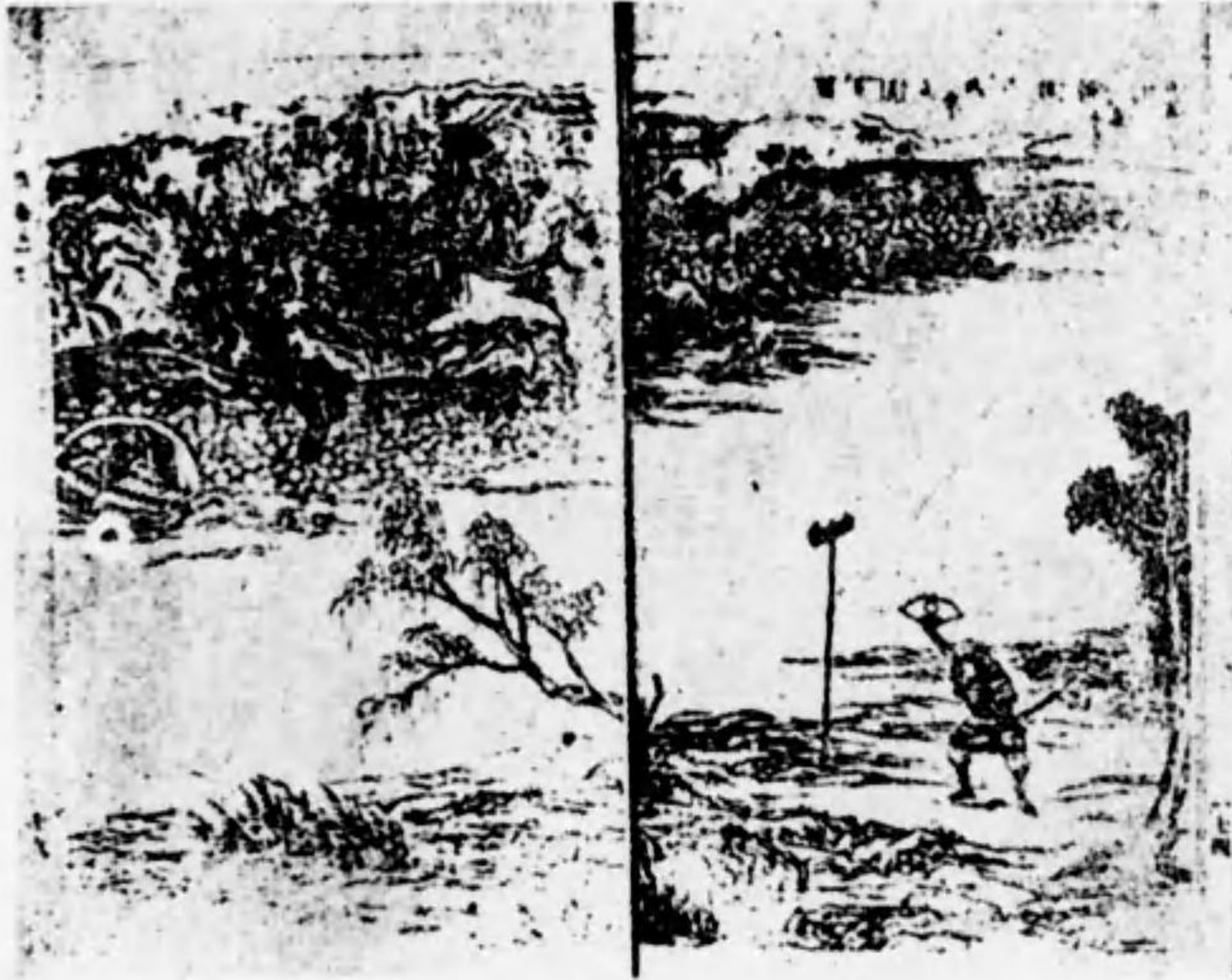
麗豊美、實に驚歎すべきものである。即ち、四壁には、蒼龍、白虎、朱雀、玄武の四神圖を作り、天井持送には或は忍冬文、蓮花文或は麒麟、鳳凰を現はし或は天人飛雲、神仙、山岳を描き、且つ天井の中心には、雲龍文を現はしてゐる。何れも支那南北朝時代の様式を發揮し、我が飛鳥時代のものと、最も密切の關係を示し、其の蒼龍の繪は、梁の蕭侍中神道碑に陽刻せる者と形式を同じくし、その鳳凰の圖は、我が法隆寺金堂の天盖に懸けたる木彫の鳳凰に酷似したものである。また其の忍冬文様は支那南北朝時代及び飛鳥時代のものと同符節を合するが如くである。

蓋し、此墓は南北朝末若くは隋初に築かれたもので、今を距る約千三百五十年前頃のものであらふ。

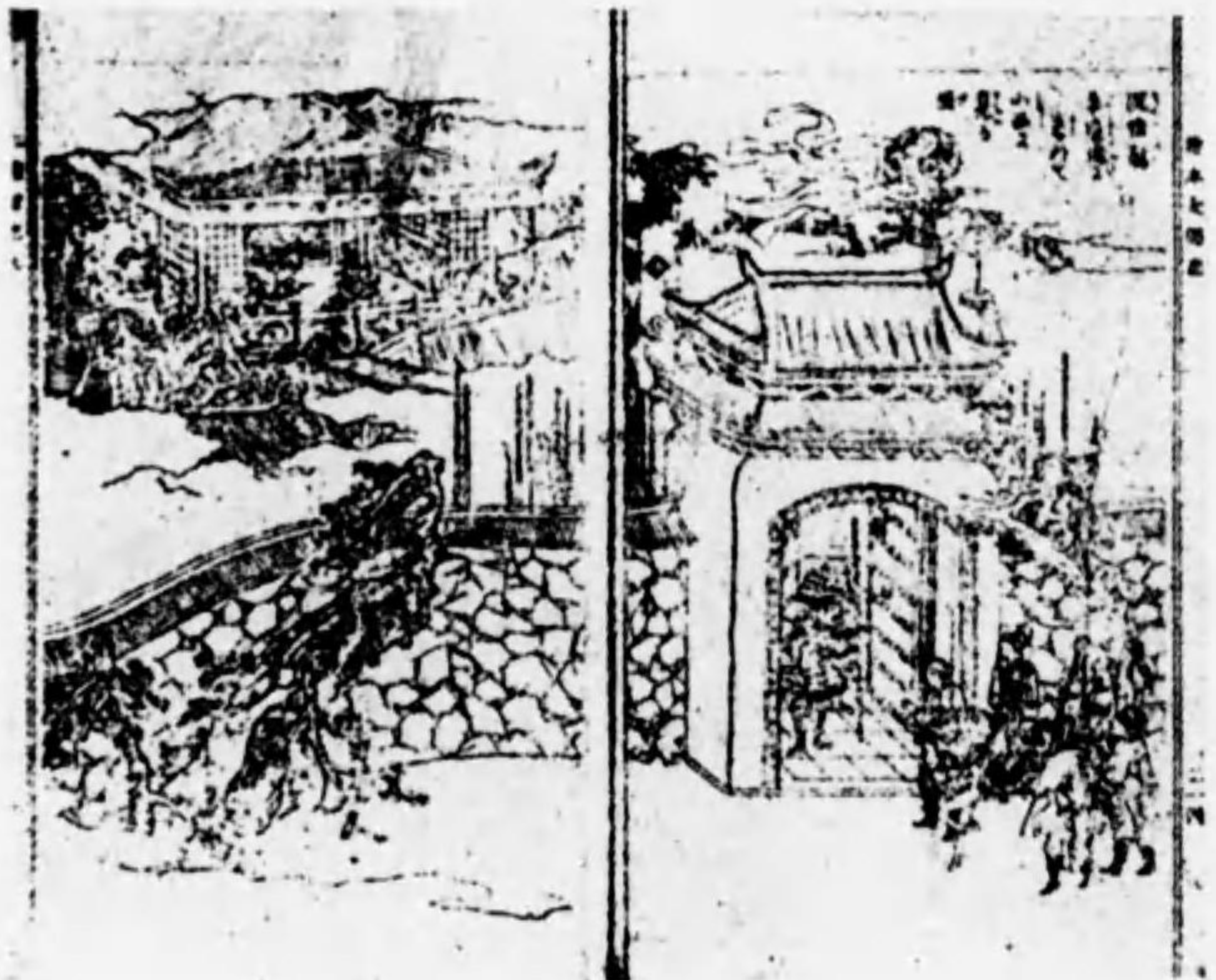
大 同 江 船 廠



壯 丹 台 全 景



小西行长書を朝鮮の城中に送る圖



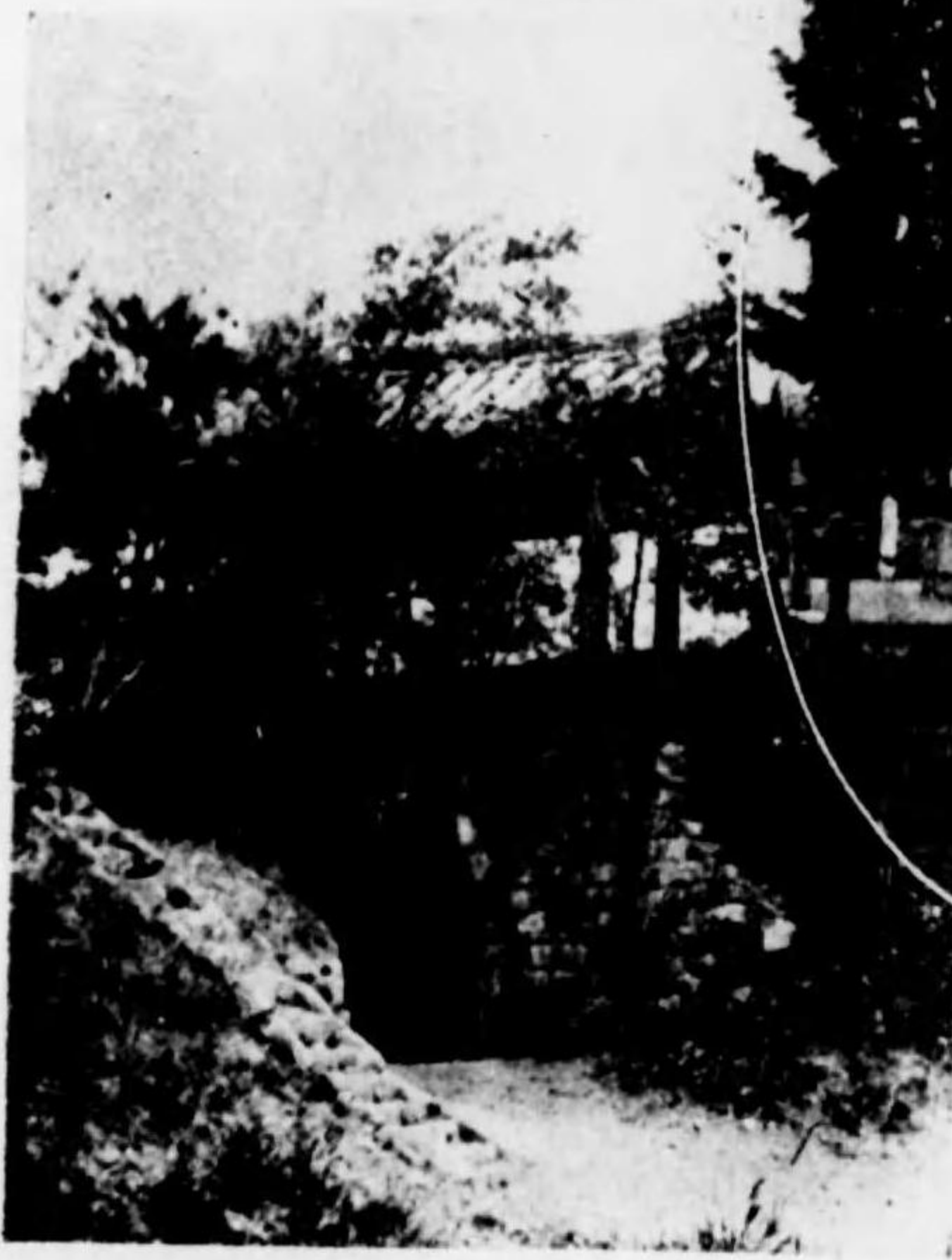
沈惟敬平壤城に来て小西に見る圖



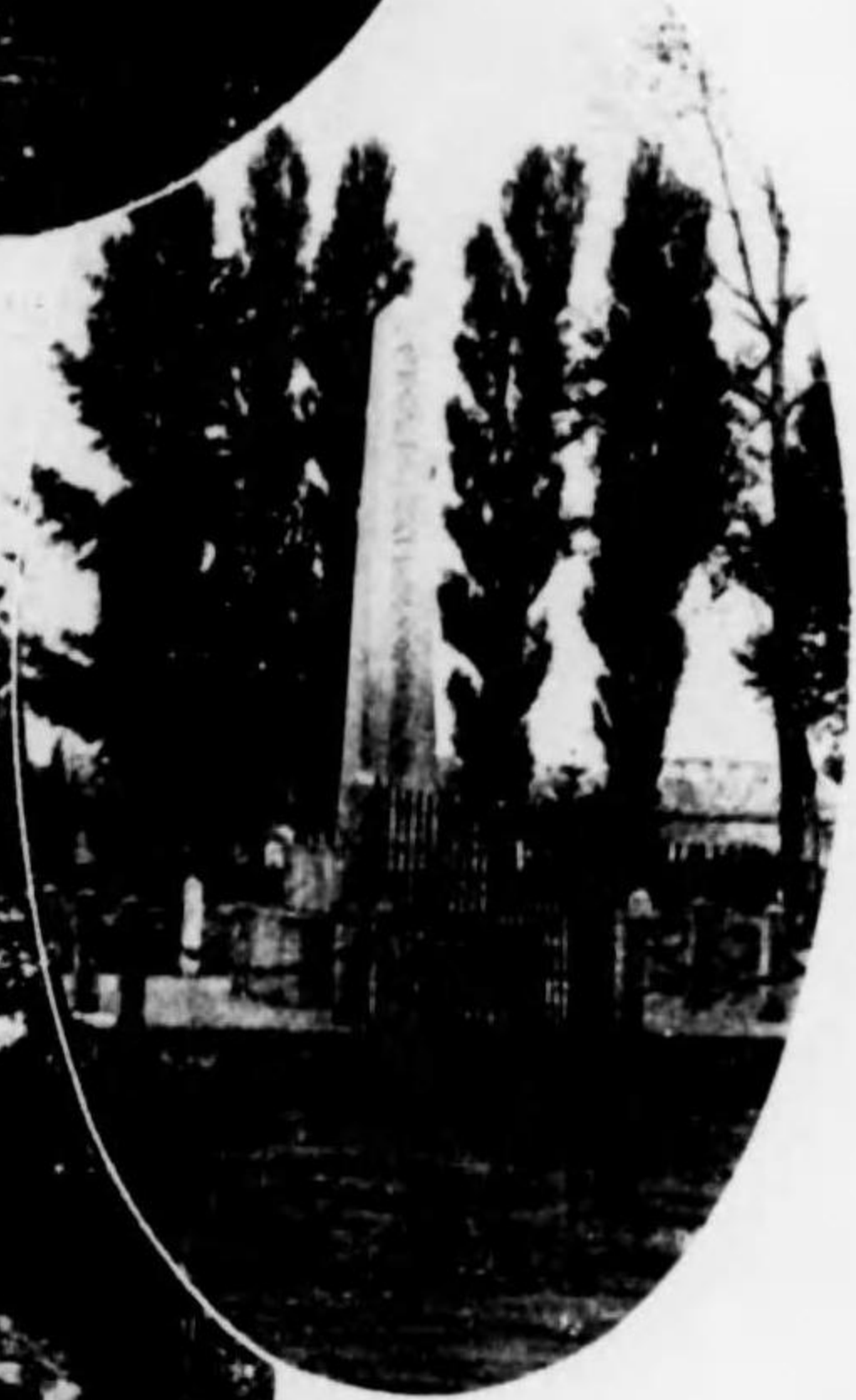
綠
光
亭



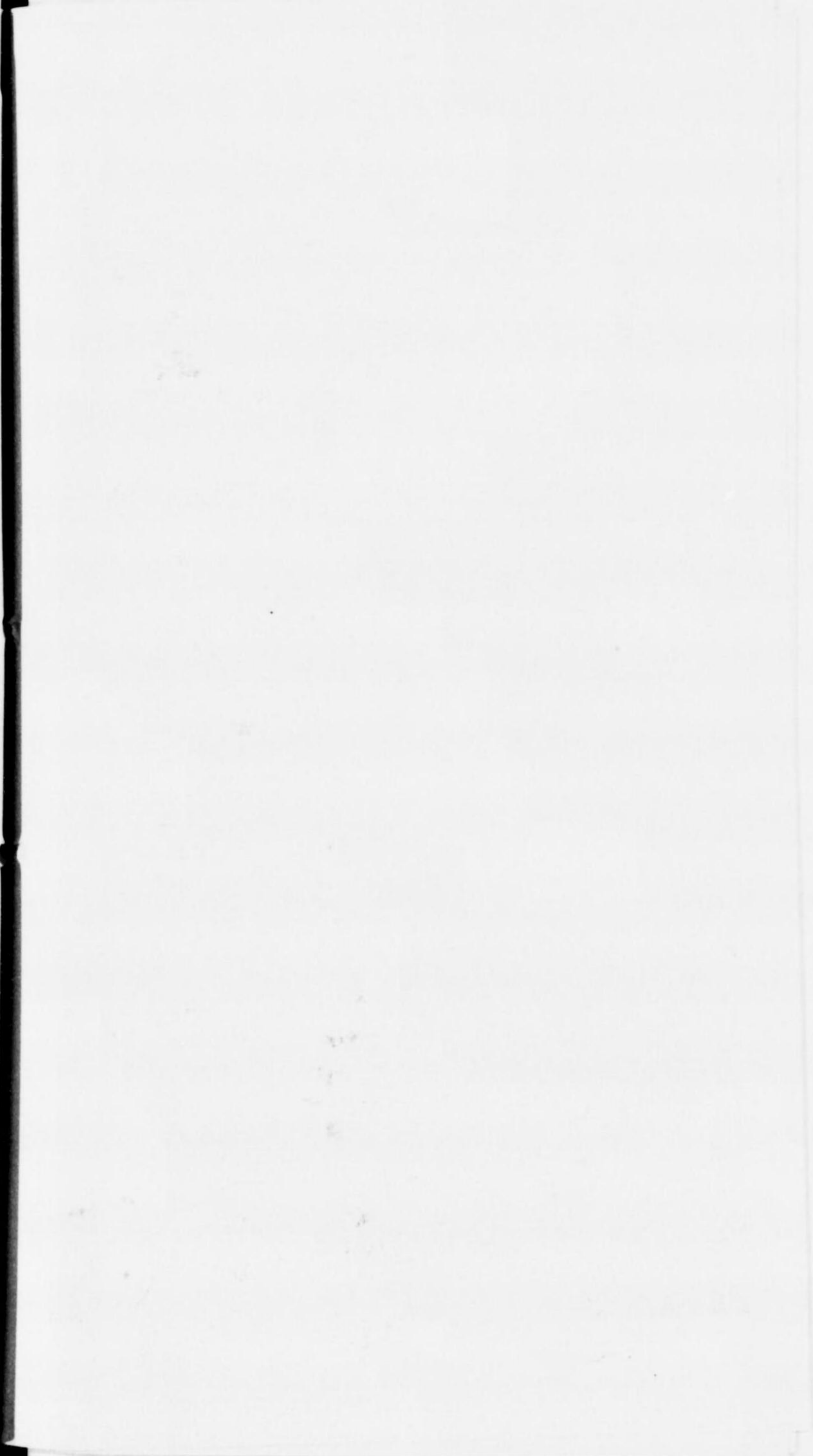
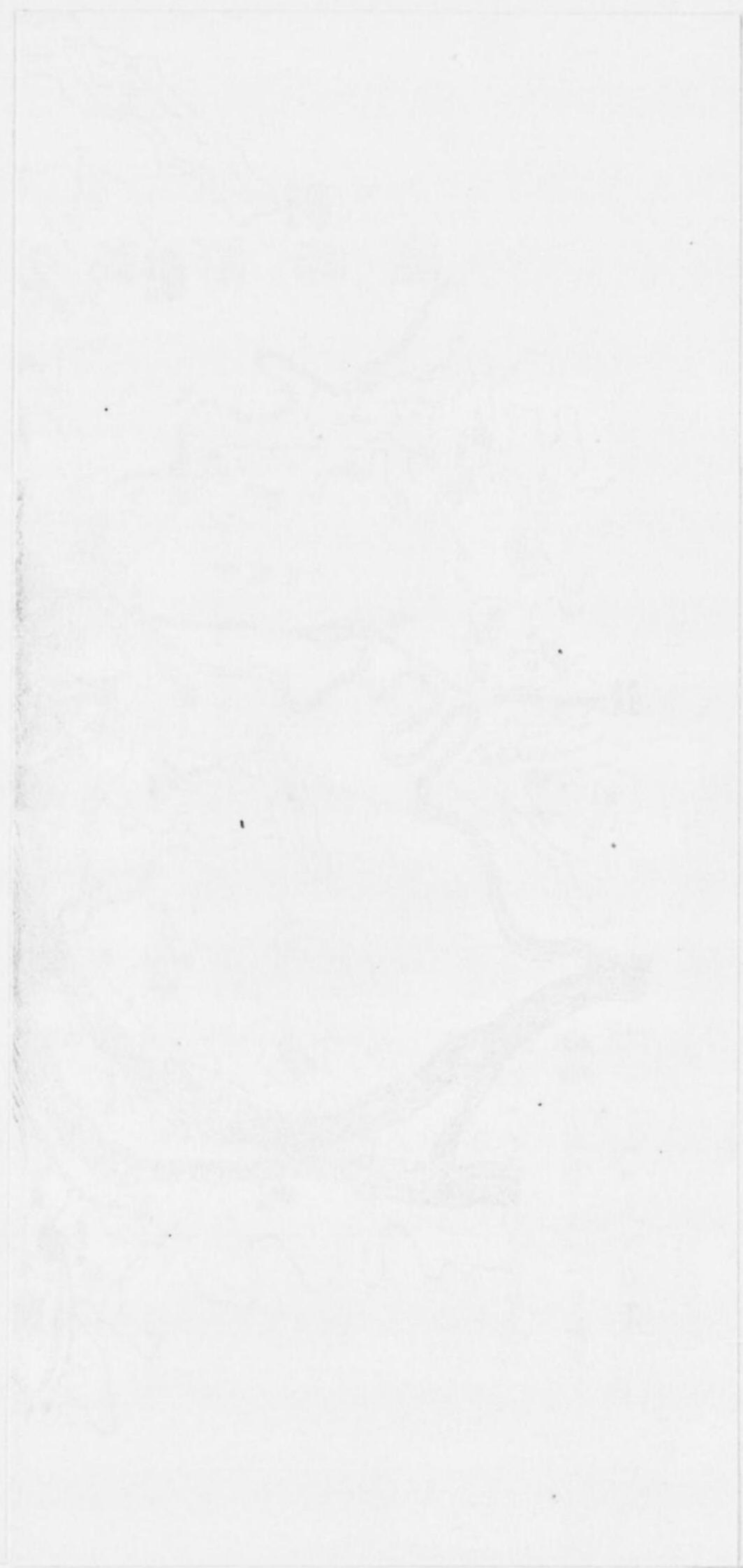
大
同
門



玄
武
門

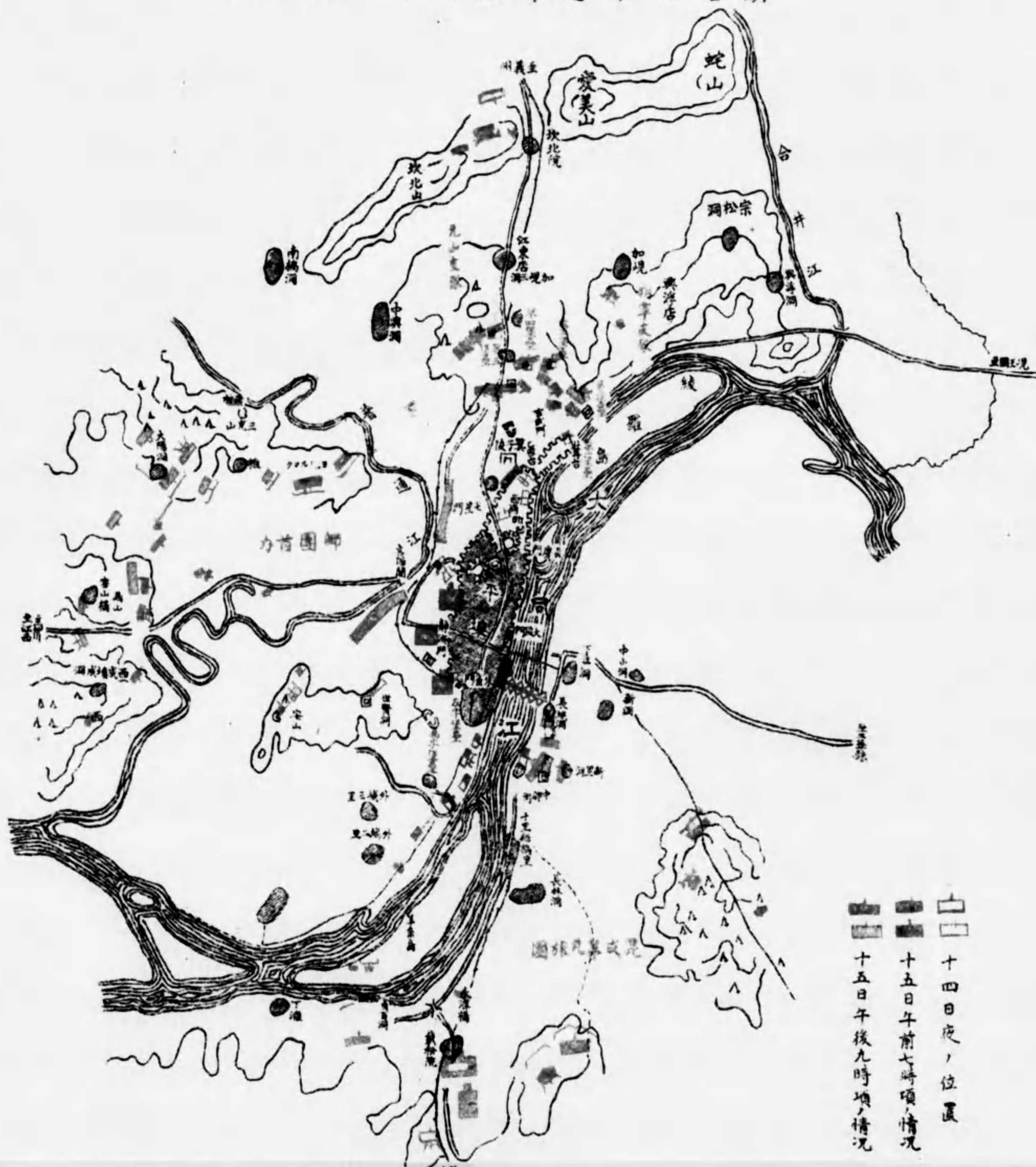


船
橋
里
忠
魂
碑



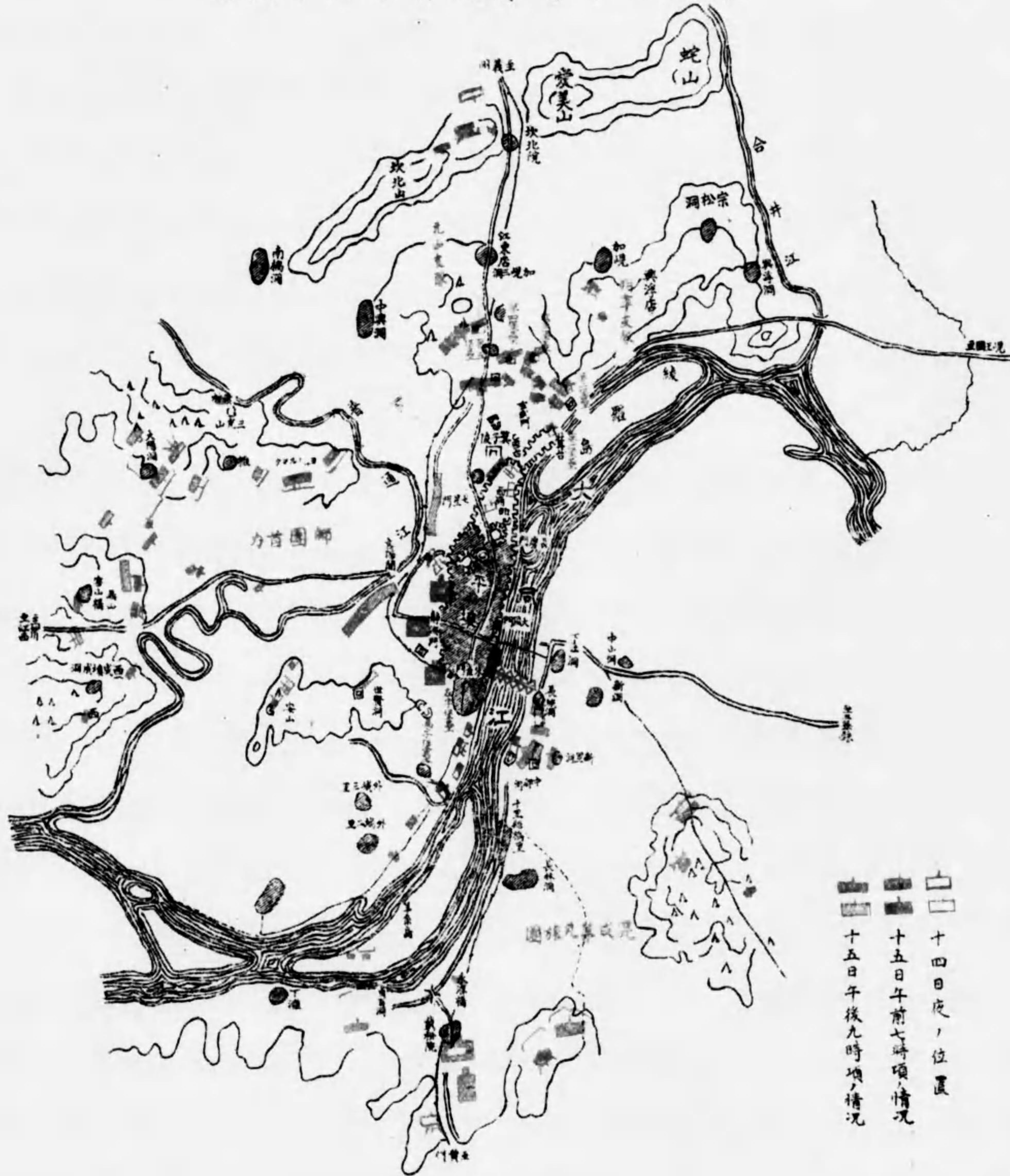
平壤包圍攻擊戰路圖

明治二十七年九月十四日五日



平壤包圍攻擊戰略圖

明治二十七年九月十四日五日



文祿役と平壤

(一)

文祿役と平壤

豊臣秀吉、既に戦國時代以來の紛亂を定め、海内統一に歸するや、進んで國威を海外に發揚し、遙かに皇化を異域に布かんとす。先づ好を隣國より修めんとし、對馬の宗氏をして、朝鮮の來聘を促さしめた。茲に於て朝鮮は天正十八年、使者を聚樂第に送つて方物を獻じた。翌年、その使節の歸るに當り、秀吉は「明朝若し我の要求を容れずして好を修めずんば、我はまさに大兵を發し、路を朝鮮に借りて之を伐つべきを以て、朝鮮王は宜く我の嚮導たるべし」との意を王に傳へさせたの

である。然るに朝鮮王李昭(宣祖)は大明を恐るゝの餘り、之に應ぜないので、英傑秀吉は、まづもつて朝鮮を定め、後ち明に及ばんとし、爰に文祿役の出師を見るに至つたのである。

斯くて出師の準備は滞る處なく、豫め西國の諸將に令して本營を肥前の名古屋に築かしめた。後陽成天皇の文祿元年には、秀吉自ら往きて親しく軍事を指揮したのであるが、此地は北、壹岐、對馬を経て釜山に直進するに至便である。殊に東方には、呼子灣深く灣入して名護屋浦をなし、水深ふして幾千の戰艦を泊するに適し、部署せられたる諸軍は、皆一旦こゝに來集し、隊を分ち期を定めて、幾千の貔貅舳艫相啣みて北を指したのである。この時、城櫓に登つて、全軍を指呼するの豊公は、まさに男子の本懐であつたであらう。

出征軍の總數は、約十五萬、宇喜多秀家之が元帥となり、陸軍を八部隊に分つて、小西行長、加藤清正之が先鋒となり、各隊順次解纜したのであつた。水軍は別に藤堂高虎、九鬼嘉隆、脇坂安治、加藤嘉明等が率ゐたのである。

(二)

文祿元年明萬曆二十九年(皇紀二二五二年)三月十二日辰の刻に、名護屋に纜を解きし先發隊小西行長の軍は、四月十三日釜山に上陸して直ちに城を陥れ、更に進んで東萊を攻め半日にして之を抜き、密陽、仁同を経て、尙州に入り、巡邊使李諡を走らし、破竹の勢を以て嶺南の諸城を屠り、一氣に烏嶺五里の山險を踰へて二十七日忠州城に迫つて

守將申砒を斬つた。忠州は京城を距る三十餘里、鞭を揚げて北を指せば、漢陽城は模糊の間にあつて、日本軍の意氣ために大いに昇る。

是より先、先鋒加藤清正の釜山に上陸するや、行長既に前進せりと聞き、切齒してその跡を踐むを好まず、別路を取り、轉鬪北進して此地に至つて、行長と會した。日軍の諸將また前後して集まる。即ち諸將城外に會して、軍議を凝したのである。此時、加藤、小西兩將の間に先鋒の争ひがあつたが、結局、兩手に分れて二道より進むこととなり、行長は驪州にて江を渡り、京城東大門に向ひ、清正は竹山、龍仁を経て漢江南に出て、江を渡つて南大門を攻むることとした。更に黒田長政の率ゐる第三隊は、蔚山、慶州を経て右路を取り北進したのである。

時に國都京城にては、二十九日の夕刻に至り、忠州の敗報傳はるや

朝野大いに震駭し、車駕直ちに平壤に幸し且つ諸王子を諸道に分遣して勤王の兵を募ることとなつたのである。茲において、吏曹判書李元翼を平安道巡察使とし、崔興源を黃海、京畿兩道の巡察使とし、皆即日出發せしめ、それ〴〵撫諭せしむる處ありて以て、巡幸に備へたのである。

四月三十日、車駕遂に城を去つて西巡した。この時、禁軍は四方に奔竄し、暗に乗じて逃走する者、市中に肩背相摩する有様であつた。西大門を出つる時は、天將に明けなんとする頃であつた。願望すれば、南大門内の倉庫は早や火を發して、焰烟天に漲つてゐたが、群臣は互に相顧みて、一言を發するものとてもなかつた。石橋に着いた頃、天俄かに大雨となり、碧蹄館にては、雨益々甚だしかつた。王は、尹斗壽を召して

佩刀を解いて之に與へて「卿等兄弟は予の行に離るゝ勿れ」と諭示せられた。王駕開城に入つて駐まること二日、南門樓に出御して、父老人民を召し慰諭する處あり、且つ又已を罪する書を八道に下し、義兵を募り、薄暮車駕更に開城を捨て、平壤に向つたのである。

行長は五月二日東大門に到つたが、門扉堅く鎖されて、城に入るを得ない、即ち水門を破つて突入すれば、城中寂として一兵の影さへ無い。大いに怪み、商民を捕へて尋ぬるに、大王三日前に西方に蒙塵せりといふ。斯の如くにして、日本軍は一戦を交へずして京城を占領したのである。清正は一日後れて城に入る。此後十數日間諸將京城に留まつたのである。而して京城より釜山に至る數十城は皆日本兵の據る處となり、要所には「つなぎの城」を築き、烽火をもつて諸營と相應じた

のである。

(三)

京城に於ける軍議の結果、小西行長は明への通路平安道に、加藤清正は咸鏡道に、黒田長政は黃海道に、烏津義弘は江原道に進撃することとなつた。

やがて日本軍は進んで、臨津江に達したが、朝鮮の都元帥金命元は南岸の船を奪つて、悉く北岸に繋ぎ、日本軍の襲來に備へたので、容易に渡ることを得ずして、滯陣十餘日に及んだ。日軍即ち一計を案じ、敗走の状を示し、敵を誘出して之を撃滅した。

是より先き五月八日、國王の平壤に着かるゝや、平壤監司宋言慎、三

千餘騎を領して車駕を迎へたので、國王以下始めて安堵の思ひをしたのであつた。この喜びも東の間で、十九日には臨津江大敗の報あり上下復々膽を喪つたのである。即ち直ちに閣議が開かれた。尹斗壽等は平壤の地勢を説き、守るに易く攻むるに難く、且つ軍兵萬人あり糧食も亦多ければ、以て死守すべきであるとして、滯留説を主張したが國王の意氣既に阻喪して、留まるの意なく、先づ難を寧邊に避け、事危ふければ、更に義州若くは江界に行くべしとの議を定め、六月十二日復もや車駕は平壤を後にして、寧邊に向つたのである。

日本軍は、既に臨津江を渡り、開城を陥れて小早川隆景之を守り、黒田長政は白川を破つて黄海道を制し、大友義統は平壤の南十四里の鳳山に屯し、且つ平壤との間に、二箇處の砦を築き、行長と義統の兵を

分屯せしめ、以て京城との連絡を保つことゝした。而して小西行長宗義智は、六月八日進んで大同江に達し、大同門の對岸附近より、船橋里附近一帯に亘つて、陣取つたのである。

(四)

日本軍大同江に到着して三日目の事である。行長一兵卒をして、紙片を木末に懸け、之を江岸の沙上に挿さしめた。時に柳成龍等は練光亭より之を望見し、火炮匠金生麗をして、小舟に掉さし、往て之を取らしめた。この時、日本兵は刀を帯びずして、徐行して來り、生麗と握手し其背を撫して書を送つた。韓軍之を披き見れば、平調信及び玄蘇より禮曹判書李德馨にあてた書面で、調信及び玄蘇は、曾て韓に使して德

撃を知り、彼によつて和を議せんと欲したものであつた。かくて德馨は、自ら小舟に掉さし、調信、玄蘇も亦小舟を浮べて往き、中流に於て會見し、相勞問すること平日と異らない。玄蘇曰く「我れ道を貴國に假る貴國之を許さず、遂に轉帳此に至る耳」と德馨曰く「奚んぞ師を退けて議せざるか、乞ふ營を退け、徐々に議する所あらん」と。竟に要領を得なかつたのである。(口繪参照)

此のとき、城内韓軍の配陣は金命元、柳成龍等は練光亭に居り、宋言慎は大同門を守り、兵馬使李潤德は浮碧樓に據り、慈山郡守尹裕俊等は長慶門(今の開帝廟前の江岸)を守り、城中の士卒民夫合せて、三四千を城堞に分配してゐた。さりながら、部伍明かならず、城上の人、或は密或は疎、肩背相磨すかと見れば、數槩を連ねて一兵も居ない處もある。

有様であつた。而して乙密臺の近處の松樹の間には、衣服を懸けて疑兵を作つて居たのである。

日本軍は、大同江の對岸に一字形の陣列を布きて、之に對し旌旗基々たるものがあつた。而して渡江のため十餘騎を派して、羊角島附近の江中を瀬踏せしむるに、江水は馬腹を沒したとある。岸上に在來する日軍の鎗光劍影、閃々として電の如く威風あたりを拂ふ。また、六七人鳥銃をもつて江邊に至り、城に向つて發放すれば、其音響甚だ壯にして、銃丸江を過ぎて城に飛び、遠きものは、大同館(今の鍾路通)に及んで瓦上に散落し、或は城門の柱に中れば、深く入ること數寸、韓人の心膽を寒からしめた。

小西行長、兵を江岸に分駐して十餘屯を作り、對陣日を累ぬるも江

を渡るを得ず、警備大いに怠る。金命元等城上より、之の状を望見して逆襲を試みんとし、高彦伯等をして、精兵を率ゐさせ、夜に乗じて浮碧樓下の綾羅島の渡より潜かに舟によつて對岸に渡り、三更に及んで全軍一擧に襲撃せんと計劃したのであるが、時至るも機を失して、全軍渡江し盡すを得ず、渡れば既に時爽であつた。されど、日軍は尙未だ醒めず、眠りにあつたのである。時こそよしと韓軍は、急に日本軍の第一陣に突入した。この第一陣は宋義智の陣で、韓兵任旭景なる者、先登して幕に入り、亂斫したが日本軍のために戦没した。不意の襲撃に、義智の兵は一時大いに驚擾し、部將杉村智清等も、あはれ戦死を遂げたが、義智は奮戦手づから數人を斬つたといふ。白兵戦であつた。行長は速かに警を諸軍に傳へたので、忽ちに皆起き出で、逆襲したので、韓

兵は一たまりもなく退却した。日本軍の追撃呐喊頗る急であつたため、彼等は船に乗るの隙さへ無かつたのである。船上の兵も亦、日本軍の岸に迫るのを見て、狼狽して船を舣するものなく、江に投じて死するものが甚だ多かつた。餘軍は辛くも王城灘（酒巖山の downstream、綾羅島の邊が）より流れを亂して、城に逃げ還つたのである。

此の戦によつて、日本軍は始めて淺瀬を知ることを得て、日暮には全軍悉く渡江したのである。此の時、韓軍は既に散走して灘を守るものがなかつたけれど、城中には、なほ備あるを疑つて遲疑して進まなかつた。

此夜、守將は城門を開いて、悉く城中の人を出し、軍器火砲は、風月樓（大同門の内側）の池中に沈め、順安及び江西に走つたが、日本軍は全く

氣附かず、追讞しなかつたのである。

翌朝になつて、日本兵牡丹臺に登つて城を觀望して、始めて人無きを知り、城に入つた。かくの如く、平壤城は戦はずして陥つたのである。時に文祿元年六月十三日、日本軍釜山上陸以來僅かに六十一日目である。

小西行長既に平壤を占領し、城中の穀類十餘萬石を分捕り、宗義智松浦鎮信、宇久大和守等と兵二萬をもつて城を守る。

かくて行長は書を元帥宇喜多秀家の許に送り、その援兵を迎へて一舉鴨綠江を渡らんと計つたが、秀家之れを許さず、已むなく平壤に留まつたのである。當時連戦連勝の勢に乗じて、直進鴨綠江に至るは容易の業なるに、その意見の用ゐられざりしは、千載の恨事であつた。

平壤落城後、韓軍においては、柳成龍は安州にて明軍の接待及び軍糧蒐集に従ひ、金命元、李元翼等は肅川、順安に駐屯して散卒及び江邊の土兵を召集し、再び軍容を整へて日本軍と遙かに相對峙したのである。

平壤の口碑に傳はる妓生桂月香の物語は、この滯陣中のことである。即ち、小西行長の副將に勇力絶倫の者があつた。桂月香はこの勇士に捕へられたが、大いにその寵を受けてゐた。一日、月香は親屬に會はんことを乞ひ、許されて城壁の上より兄を連呼した。時に金應瑞といふ勇士現はれて自ら兄といひ城に入り、導かれて練光亭に入つた。夜になつて、その副將の熟睡を窺ひ、之を斬つて、其首を携へ、月香と共に城を脱出せんとしたが、兩人共に逃れ難きを知り、月香を斬つて城を

踰えて還つたといふのである。金應瑞とは龍岡郡の産で同地に其の子孫といふものが居り、種々の遺物を傳へて居る。また、上需普通學校側にある義烈祠はこの月香を祀つた祠である。固より一場の作話であるが、此種の物語は各地に残つて居る。

(五)

朝鮮王は六月二十三日、義州に到着し、明の救援を乞ふこと切にし、屢援兵を促した。李德馨の如きは、遼東巡撫郝杰に向つて日に六度書を送り、帳下に慟哭して動かなかつた程である。是に於て、明は援兵を派することとなり、遼東の副總兵祖承訓は五千の兵を率ゐて來援し、七月鴨綠江を渡つて安定館に至つた。柳成龍は之を嘉山に迎へた

のである。祖承訓は日本軍の今なほ平壤に留まると聞いて、「天我に大功をなさしむるなり」とて得意満面、酒を舉げて祝したといふ。此日三更軍を發して進んで平壤を攻む。時に七月十九日であつた。

小西行長は、平壤に滯留すること既に約一ヶ月に及び、城内の守備また大いに怠つて居たのである。夏の夜の短かき夢を破つて、明軍は突如として城に七星門より突入し來つた。然れども、城内路狭くして騎兵の駆引は殆んど不可能であつた。我が行長は、この不意打を喰ひながら、諸將を督して應戦し、鳥銃を亂射すること雨霰の如くであつた。明の先鋒史儒は、このとき丸に中つて馬より落ち戦死を遂げた。面白いのは當時の日支軍の武装の相違である。日本軍の人馬は、みな鬼頭獅面を被つて、異様であつたので、見なれない明の軍馬は、駭き狼

て、隊を亂して奔走し、全く收拾すべからざる有様であつた。日本軍はこの虚に乗じて突撃して明兵を殺すこと數を知らない。祖承訓やむなく軍を退けんとしたが、連日の霖雨にて泥濘深く進退意の如くならず、これがために討たるゝものまた算がなかつた。祖承訓は漸く身を以て逃れ、順安、肅川を過ぎ、夜中安州城に至つて馬をとぐめ、驛官朴義儉を呼んで「我軍今日多く敵を殺したれど、不幸にして史儒傷死す。天時亦利あらず、大雨泥濘敵を殲す能はず、當に後軍の至るを俟つて進軍せん、汝宰相(柳成龍)に語り、敢て動搖すること勿れ」と言ひも終らず馳せて、兩江を渡り北に還つた。蓋し彼の日本軍を恐るゝこと甚だしく、その追撃を恐れて、ひたすら退却したのであつた。

この戦の後、韓軍は、巡察使李元翼、巡邊使李贇等は兵數千名を集め

て順安に屯し、金應瑞等は龍岡、三和、甌山、江西四邑の軍を率ゐて二十餘屯となし平壤の西に陣し、別に金億秋は水軍を督して大同江下流にあり、三方より平壤を遠巻にして居たのである。而して行長の一步も進撃せざるは、勢の衰へたるためならんと考へ、明兵を待たず平壤を自ら回復せんとし、八月一日三路より平壤を攻めたが、日軍の先鋒のため大破し、夥しき殺傷を蒙つて悉く順安に逃走した。此の如き衝突の他、何事もなく九月に入つたのである。

(六)

祖承訓の敗走は、明國を大いに震動せしめた。神宗は令を各地に下して兵を募り、益々沿海の防禦に嚴にし、日本軍に備へしめた程であ

つた。復た能く朝鮮を恢復する者あらば、銀一萬兩、伯爵世襲の懸賞までも出したが、誰一人之に應ずるものがなかつた。此の不安の機に乗じて現はれたものが、即ち沈惟敬である。彼は浙江省の産で、市井の無頼漢であつた。偶々北京に客遊して、吳の俠妓陳澹如と通じた。妓の僕に鄭四といふものがあつて、能く日本の事情に精通して居たので、惟敬は彼に就て詳しく日本の様子を學んだのである。遂に、大司馬石星に知らるゝ處となつた。四苦八苦の石星には、惟敬の説く處は、寔に渡るに船であつた。されば一見、直ちに彼に傾倒した譯であつて、即ち講和問題を提出して、一時兵を緩めんとしたのである。沈惟敬は神機三營遊撃將軍といふ肩書をもつて平壤に來り、行長と會見する任を負うたのである。講和問題といふ大舞臺に立つた花形沈惟敬そのもの

は、實に斯の如き人物であるが、之に籠絡せられて、勇猛無雙の我戰士が、百戰百勝の効を、一朝にして空しくしたのは惜みても餘りがある。さて惟敬は、九月鴨綠江を渡つて順安に至り、先づ書を日本軍に致さんとし、一家丁を送つた。即ち家丁沈嘉旺は、黃布に書を包んで、之を背負ひ騎馬にて普通門より城に入つた。行長書を受けた、惟敬と會見せんことを求めた。こゝに於て、講和使沈惟敬は、僅か家丁三四人を從へて第一回の會見のために平壤に向つたのである。之を迎えた行長は盛んに兵威を示しながら、城北の坎北山下において會見したのである。日本兵の劔戟雪の如き内に、惟敬は馬より下り、陣中に來り顔色自若たるものであつたといふ。即ち共に講和を議し、且つ往返五十日を以て明帝の確答を得る期と定めた。而して期間内は日本軍一切出

で、掠むることなく、還り来るを待つことを約し、平壤一里の地に木標を建て、還つたのである。(口會参照)

沈惟敬の和を約して去るや、我が軍は兵を收めて敢て動かかなかつた。五十日の期間は、平穩の裡に過ぎたが、惟敬はついに來なかつたので、行長之を疑ひ、新春、將に馬に鴨綠江に飲せんと聲言した。平壤より遁れ去るものこの事を傳へたので、韓人大いに懼れをなした。漸く十一月六日に至つて、惟敬再び來り、平壤に留まること數日、和好の成る近きにありと告げ、現状維持を約して去つたのである。

(七)

祖承訓の敗軍以來、臆病風が明軍を襲ひつゝあるときに、たゞ待み

としたものは、百戰の功ある提督李如松であつた。彼の勇將六千餘人南北の官兵四萬三千餘人を率ゐて朝鮮に向ひ、十二月二十四日鴨綠江を渡り、明けて文祿二年正月元日には安州に到着したのである。旌旗整肅一軍の意氣昂然たるものがあつた。柳成龍は如松に會見し、袖より平壤の地圖を出して形勢を指示すれば、如松つぶさに傾聽し、自ら朱筆を以てその要點を記した。且つ曰く「小西の軍はたゞ鳥銃を待むのみ。我れ大砲を用ひば皆三五里を過ぐ、倭軍何ぞ當るべけんや」と傲語したのである。

李如松まづ副摠共查大受をして、順安に往かしめ、日本軍を欺いて曰く「明帝既に和を請ふ。遊撃將軍沈惟敬も亦將に至らん」と。行長大に悦び、部將をして、二十餘騎を率ゐ、惟敬を順安に迎へしめた。查大受は

之を招きよせて酒を飲ましめ、兵を伏して其部將を擒にし、從兵十七騎を殺したのである。日本兵三人漸く遁れ歸つて、變を行長に報じたので、行長始めて、惟敬のために賣られしを知り、直ちに使を大友義純の鳳山の陣に送つて、援兵を求めたのであるが、義純は來援せざるのみか、狼狽して京城に退却した後であつた。

明の本軍は、既に肅川に着き、日暮れて、糧餉を攝る際に查大受よりこの報を受けた。如松、之を聽いて直ちに弓を彎き、弦を鳴らし、自ら數騎をもつて馳せて順安に赴き、諸營陸續として、進軍し南に向つた。翌日曉を破つて來つて、平壤を圍んだのである。時に一月六日である。

當時の平壤城は周廻二萬四千五百三十九尺、高サ十三尺の石築を廻らし、長慶(東)、普通(西)、含毬(南)、七星(北)、大同(正東)、正陽(正南)の六門を有し

各々樓或は子城をもつてかためて居た。又別に長慶門と大同門との城下には、水門を設けてゐたのである。行長はこの城内に、日本流の築城をなし、更らに牡丹臺の方面は、柵を結び、塹壕を堀り、掩蓋を作り、銃眼を切つて防禦に備へ、據守したのである。而して城内に於ては、主力を七星門より普通門方面に配し、少數の一隊をもつて含毬門方面を守らしめた。其他最後の防禦物としては、今の關帝廟の後方臺地及び萬壽臺一帶に掩蓋を有する塹壕を堀り、更に練光亭、大同門附近より今の鐘路を経て、章臺岨の高地に亘つては、曲窟を設けたのである。而して當時、平壤籠城の日本軍の兵數は、約八千人と想定せられる。

此の日、内城を俯瞰し得る要所である牡丹臺を真向に攻めたのは、提督李如松自身であつて、之と對戦したのは、實に行長其人であつた。

日本軍は城に登つて防戦し、銃丸を放つこと雨の如く、明兵數千を
 仆した。李如松、味方の殺傷甚だ多きを見て、一時に攻むるの不可を悟
 り、明日計を設けて之を攻めんとし、兵を收めて本陣に退いた。

夜に入つて、行長は敵の晝間の疲勞を考へ、一部の兵を遣はして、之
 を襲ふたが、敵は火箭を發して防ぎ、我兵は其半を失ひ成功しなかつ
 た。また、義智は含毬門外の韓軍に對し、潜かに大同門を出で、江に沿ふ
 て迂回し、背後より夜撃を試み大いに敵を破つた。即ちこの夜は、明軍
 及び韓軍に對して夜襲を試みたのみであつた。

翌くれば七日、明軍は總攻撃準備のため、大軍を集中したのである
 前日の小手調べに經驗を得た明軍の將士は、先き駈けの勇を振はん
 としたが、此日は遂に進撃の令は出なかつたのである。

(八)

明軍の總攻撃を受けて我が軍、終に平壤を棄て去つたのは、其の翌
 八日の事であつた。早曉李如松は令を三軍に傳へて、一齊に攻撃を開
 始し、三方面より、押し寄せたのである。即ち、七星門を襲ふたのは張世
 襲、楊元の率ゆる軍で、普通門は李如柏、李芳春の軍を以てし、含毬門は
 祖承訓、駱尙志及び韓軍李謐、金應瑞の兵であつた。而して查大受、吳惟
 忠は牡丹臺を攻めたのである。當時李如松の本陣は七星門外にあつ
 たが、親兵二百餘騎にて、往來親しく指揮に當つた。

時は、氷厚き極寒である。氷上を萬馬左右に駈けめぐり、脣を
 飛ばし塵を雜へ、太陽下射して、盃鍙銀光、燦爛眩曜、萬伏目を奪ふ有様

文獻役と平壤

であつた。日本軍は、陣上に五色の旗幟を張り、長槍大刀を帯び、刀を齊うして外に向ひ、頻りに拒守の計をなしてゐた。

午前八時頃になつて、明韓軍は、漸次城門に迫り、俄かにして、諸陣一齊に砲門を開いて發砲すれば、その響き萬雷の如く、山岳ために震動し、連りに亂射する火箭のため、烟燄數十里に亘り咫尺を辨じない程であつた。李如松は軍を鼓して、城に迫れば、日軍陣中に伏し、彈丸を亂射し、湯水大石を滾下して近かきめず、また長槍大刀を用ひ、外に向つて刃を竝べ、其の狀森として、蝟毛の如くであつた。明軍も敵し難くして軍兵漸次却く。李如松之を見て、その退却するもの一人を斬り、巡りて陣中に之を示して軍律を嚴にし、且つ身を挺して、前面に現はれ先登するものには、銀五千兩を賞すと呼號した。

文獻役と平壤

此の戦は、日本軍には非常な難戦であつたが、しかも勇敢なる日本軍は飽まで拒守したのであつた。されど多數に無數、銳兵に疲兵であるのみならず、この戦は大砲と小銃の戦争であつて、いかに勇敢なりとて、器械力の相違は如何ともするを得なかつたのである。戦利あらず、あはれ含毬門の守備は破れて、敵は一時に進入し來り、ついで普通門を失ふに至り、日本軍は今や外城を保つ能はずして最後の防禦線たる土窟、曲窟即ち今日の塹壕及び掩蓋に退いたのである。この外城とは七星門より普通門に至り、現存の土壘に沿ふて共同墓地のある案山の高地を包み東折して兵營前より瑞氣通りに出て、江岸に沿ふて、大同門、練光亭を経て、乙密臺にいたる城壁をいふのである。

明軍が多數の死傷者を出しながら、外城を占領した時は日没後で

あつたので、日本軍の夜襲を恐れこの日は兵を収めて本陣に退いたのである。日本軍もこの激戦に損傷夥しく、加ふるに大友義統の援兵は待てども遂に來らなかつた。是に於て、小西行長は諸將を會して最後の緊急軍議を開き、善後の策を講じたのである。その結果、松浦鎮信の意見に従ひ、一先づ此城を棄て、再舉を圖ることとし、潜かに夜陰に乗じて、大同江の氷上を渡つて城を出たのである。翌九日夕刻には、大友軍の據りし鳳山に至つたが、兵既に退去後で如何ともし難く、疲勞を忍んで龍泉に至つた。此處は、黒田長政の臣小河某の守備せるところで、一同懇ろなる慰勞を受け、粥を食ふて、漸く飢寒を免かれたのである。長政この報を受け、直ちに迎へて白川城に入れ、衣服を給し數日間休憩せしめたので、始めて蘇生の思ひをしたのである。かくて、小西

の軍は、京城に引上げたのである。

日清戦役と平壤

(一)

明治二十有七年、日清の兩國將さに干戈相見えんとするや、日本は先づ朝鮮の首都京城の地を扼め、清國は朝鮮半島の重鎮たる平壤城に據り、兩者各約一箇師團の兵を集中して相對峙したのである。平壤は半島縦貫の一大幹線に當り、北鮮に於ける要衝の都邑である。且つまた、地形は自然の要害をなし、東南一帶は大同江の巨流を繞らし、水深く河幅廣くして、而も架橋の便なく、西北面は丘陵連亘して、長蛇の如く、天然の城壁を成してゐる。清軍は約一萬五千の兵を擁し、この天

險の地を扼守して、我軍の北進の途を絶たんとしたのである。憶ふに清國の平壤に敗れんか、鴨綠江に至る一路は殆んど遮るに由がない。若し平壤の守りを保たんか、陸上我か進軍の途がないのである。乃ち平壤の成敗は半島に於ける勢力の消長にして、又同時に日清兩國軍の興廢の別るゝ處である。これ清軍が頑強に抵抗して、平壤を死守し我軍また猛烈なる攻撃をなし、之を陥落したる所以である。實に平壤の包圍攻撃は、日清戦史上、最も重大にして、且つ光彩あるものである。

(二)

開戦の當初、我國は時局に對し、多少の平和的希望を有したので、初めは纔かに一混成旅團を派遣せしに過ぎなかつたが、清國は一方に

は義州方面より陸續兵を平壤に集中せしめ、又一方には豊島沖の海戦ありて、遂に我をして、望みを平和に絶たしめたのである。是に於て大本營は七月三十日、第五師團長中將子爵野津道貫に對して、作戰大方針を授け、併せて師團殘部の渡鮮を開始せしめたのである。かくて、八月一日に至り宣戰の大詔は煥發せられたのである。

當時、我軍は朝鮮の首都京城を根據とせるより鮮廷の向背は、大に我軍の利害に關するところであつた。而も當時、鮮廷の首坐たる大院君以下各當局は未だ容易に我國に信賴せんとするの意嚮なく、加ふるに平壤に於ける清國兵の日に其の數を増すを見ては却つて事大の念を起さんとする傾向さへあつた。されば、我軍はまづ以て、清軍の擊退を緊急事としたのである。

我が第五師團の殘部は、八月三日乃至八日をもつて、悉く釜山或は元山に上陸し、野津師團長は釜山より駛行、十九日京城に到着した。かくて、速かに平壤の清兵を一掃せんとし、軍を分つて、左の如き前進計畫を定めたのである。

- 一、陸軍少將大島義昌の率ゐる混成第九旅團を以て、義州街道を前進せしめ、専ら敵の正面に向はしむ。
- 二、陸軍少將立見尙文の率ゐる朔寧分遣支隊は、朔寧より新溪、遂安三登及び江東を経て前進せしめ、元山より進軍中の支隊(佐藤大佐の統率)を合せ、以て敵の左側に迫らしむ。
- 三、師團長は自餘の諸隊(師團主力)を率ゐて、敵の背後に逼り、其の退路を扼して敵を西方海岸に壓迫す。

師團は右の計畫に基きて、其の歩を進め、同月十五日を以て、平壤包圍攻撃の期と豫定したのである。元山上陸部隊は、陽徳、成川を経て順安に出で、平壤の戦鬪に参加すべきを命じ、且つ詳細なる訓令をなして其の前進の便を與へた。

(三)

翻つて、清國の軍容を窺ふに、日清國交の斷絶するや、直隸總督兼北洋通商大臣李鴻章、軍機を縦攬したのであるが、李鴻章は清軍の精銳を平壤に集中し、一舉にして日本軍を撃攘せんとして、七月二十日、左の諸隊に對し、八月上旬を期して、平壤に集中すべきを命じた。

衛汝貴麾下の盛字軍六千

馬玉崑麾下の毅字軍二千(在旅順口)
 左寶貴麾下の奉軍三千五百(在奉天)
 豐陞阿麾下の盛字練軍一千五百(同上)
 葉志起及び聶士成等の率ゆる四千五百(在牙山)
 各軍は命に従ひ、豫定期日には平壤に參集せしが、就中七月二十九日、成歡に於て敗衄したる牙山軍は、創痍を裏みて、平壤に投じ、軍容紊亂を極め、士氣沮喪して、再び劍を提げて起たんとするの勇がなかつたのである。

是れより先、李鴻章は成歡の大敗を聞き、我が武威を知りて、大いに驚き、日本軍撃攘の不可能を覺り、唯平壤城を守りて久しきを持せば必ず巧計あるべしとて、嚴に其の防守を命じ、尙ほ、一方に於ては軍隊

の新募に當つたのである。この時既に、日本軍約三千人、黄州に進入せりとの報に接し、清軍の各將は、之を邀撃せんとし、各部署を定めたるのであるが、この時早くも我元山支隊の大部は成川に到着し、又混成第九旅團も黄州に進入して平壤攻撃の方策に汲々たる時であつた。葉志超は初めて、此等各所の情況を知り、平壤後路の危険を覺り、日本軍邀撃の功なくして、徒らに平壤の備へを虚にし、其の守りを失ふを恐れ、直ちに急使を發して、南北兩進軍の歸還を命じたので、邀撃の畫策も水泡に歸し、我軍途上殆んど何等の支阻なくして、平壤の包圍に至つたのである。

(四)

大島旅團長は、師團の行軍計畫に循ひ、九月十日を以て、中和に達し、此に初めて平壤清軍防備の概略を窺知するを得たのである。其の翌日、師團長より左の訓令があつた。

「長官の詳かなる報告に由り、敵の前遣兵は貴官前進のため、遂に平壤に退き、其本軍に合するを知れり、思ふに敵は大同江の巨流を前にし、險を恃んで我を待たんとするに似たり、予は之を包圍して、以て敵壘に肉薄せんとす、貴官は其旅團並に十三日を以て貴官の指揮に屬すべき砲兵第五聯隊本部及び第一大隊をして、行軍表の如く、勉めて平壤の正面前岸に接近し、以て敵の兵力及び注視を其方面に集め、之れに依りて、元山、朔寧兩支隊並に予の運動を容易ならしむべし、予は十五日を期し、四面より平壤の攻撃を遂行せんとす、

貴官宜しく慎重戦ひを避けて、其日を俟つべし、予は明日より十二浦に於て渡河を開始すべし、十四日後は萬景岱附近より記號を以て貴官と連絡の便を執るべし」とこれ總攻撃計畫の大綱を示すものである。

こゝに於て、旅團は西島中佐の指揮する各隊をして、早朝中和を發し、義州街道に依り、永濟橋に向つて前進し、十二日午前八時過を以て永濟橋の角面堡を占領し、更らに下枝大尉は一小隊を率ゐ、長城里に向つて前進し、途中歩砲兵と戦ひを交へながら載松院南方高地に突進して、本道左右の堡壘を占領した。

一方に於ては、元山支隊は、徳源、陽徳及び成川を経て進軍し、途中馬息嶺にて背梁山脈を越え、層巒重疊、道路嶮惡、行々險を夷け、橋梁を架

して、進路を開き、幾多の困難を経て十三日、順安を占領し、十四日には坎北山北方に到着したのである。

朔寧支隊は、遂安、陵洞を経て、十三日を以て、國主峴南方の山地を占領したのである。斯くの如くにして、平壤の後路は閉塞され、電線亦切斷せられ、清軍は本國との通信を全く、杜絶せられたのである。

次ぎに、師團主力の兵は、十日黃州に出で大同江を渡り、一部は江西に出で、一部は堡山の西北に止りて休養し、十四日本隊の主力は、夜半前進を起し、其の一部は午前六時頃、ヨツタルマルクの高地を占領し、今や、平壤は全く日本軍の重圍の裡に陥つたのである。

(五)

是よりさき、平壤の守將提督葉志超は、漸く日本軍の包圍する處となるを知るや、防守の決心をかため左の命令を下して、從來の守備を補ふことゝしたのである。

一、南門(朱雀門)外の江南には、馬玉崑の一營、盛字軍の一營共に、橋頭に位置を取り、若し緩急あらば、馬玉崑の一營、聶桂林の一營を増加して迅速赴援すべし。

二、大西門(靜海門)より、盛字軍、毅字軍の防守交界に至る間に於て、若し緩急あらば、盛字軍を以て、迅速赴援すべし。

三、北門外の山上には、江自康(牙山軍)の兩營を置き、若し緩急あらば、豐陞阿の盛字軍を以て迅速赴援すべし。

斯くの如くにして、諸軍を戒飭するところありしも、一萬五千の清

軍は、孤軍重圍に陥り、守將殆んど策の施すべきを知らなかつた。日軍總攻撃の前夜、即ち十四日には、諸將會議を開き、一旦城を捐て、退却し、功を後日に圖るに若かさるを提議したるも、總兵左寶貴に遮ぎられて、こゝに死守することゝなつたのである。

(六)

平壤に於ける我軍の包圍攻撃は、九月十五日拂曉を以て、開始せられ、午後四時四十分に至り、城上終に白旗の翻るを見る。一萬五千の清軍、天險の城壘に據りて、防戦よく力めたりと雖も、猛襲にたえず、一日を待たずして、擧げて我に降つたのである。以て其の戦ひの壯烈を想ふべし。今、我軍當時の行動を略述せんに、

(イ) 混成旅團は十二日永濟橋の角面堡を占領し、十三、十四の兩日は敵の主力を中碑街(船橋里)に集注せしめ、盛んに砲火を浴せて敵を牽制し、更に十五日午前二時部署を右翼、中央、左翼、本隊に分ちて、運動を開始した。右翼は午前四時頃、船橋里に達し、東方の角面堡を奪取し、其一部を北進して、長城里堡壘に當り、一部は西進して、江岸に出でたるに敵の堅固なる角面堡に衝突し、頗る苦戦したるも、幸に地物を利用して死守して天明を俟つた。中央隊は、午前四時頃、船橋里江岸の角面堡に衝突し、右翼隊と合して、之に當れるも、敵は頑強に抵抗し、加ふるに對岸の敵砲盛んに、我を側射し、頭を擧ぐれば、狙撃を蒙り、若し退却せんとせば、追撃を行はんとし、我兵大に窮地に陥つた。是より先、山本砲兵中隊は、中碑街東側に急造肩墻を構へ、長城の堡壘を射撃したるも、効

頗る微なるをもつて、中山洞の舊陣地に復歸した。このとき、中央隊は彈藥缺乏となり、多數の將校又敵彈に斃れ、朝來一椀の飯、一掬の水も得ざる苦戦であつた。右翼隊は、午前三時、夜陰を利用し、小舟を以て羊角島西端に渡り、更に午前六時頃、全部右岸に上陸し、敵兵を撃退しつゝ、平川面附近を占領し、午前八時、外城二里に入りしも、敵は銳を盡して抵抗せるため、我軍は一時、渡河點の防禦線内に退却し、各方面の戦況の發展を俟つに至つたのである。斯くの如く、正面旅團は、他の各軍に先ち、連續四日に亘り、惡戦苦闘せるも、之がため師團本隊及び朔寧元山兩支隊をして、甚大なる抵抗を受くるなくして、敵に接近することを得しめたのである。いま、船橋里の江畔に立つて

嗚呼我旅團將校以下百四拾名忠奮戦死之處」

の十九字を刻したる忠魂碑を仰ぐもの、誰か當時を追懐して、一掬哀悼の涙なきものがあらふ。

(口) 朔寧支隊は九月十三日國主峴南方の山地を占領し、十四日は敵情偵察と元山支隊との連絡に力め、夜半運動を開始し十五日の拂曉に至り、加峴南方の丘陵に達して、始めて西南約一千米の高地に敵壘あるを認め、激烈なる戦闘の後、之を占領し、直ちに城壁及び牡丹臺附近より雨下せる機關砲の彈丸を冒して前進し、富田大隊は牡丹臺西北約四五米の稜線に其全力を展開し、乙密臺望樓及び其附近の敵を射撃し、山路大隊は、牡丹臺北方外城の凸角に肉薄して、牡丹臺の敵を攻撃した。砲兵中隊、又、乙密臺望樓に向つて、砲火を開きたるも牡丹臺の敵兵頑強に側射せるより、目標を此に轉じて應戦したるに、着弾悉く

命中して、虚砲なく、戦線ために喊聲を聞くに至つた。加ふるに、元山支隊の砲兵又並峴西方より、全力を此に集中せしより、敵兵狼狽して爲す處を知らず、山口大隊は、乃ち突撃して、牡丹臺北方、城外凸角を奪ひ勢ひに乗じて、牡丹臺圓郭に募進す、敵兵遂に支ふる能はずして、走りて乙密臺の南方約三百米の穹窿門に入る。兩中隊は、是に於て、全く圓郭及び其附近を占領したのである。時に午前八時十分であつた。

(ハ) 元山支隊は九月十四日坎北山北方に到着し、翌十五日、一隊を割いて、朔寧支隊の一部と合し、加峴西方の高地に出て、大激戦の後、敵を七星門方面に潰走せしめたるも、牡丹臺には、敵の機關砲あり、且つ乙密臺其他西北一帯の城壁よりも猛烈なる銃砲火を送り、再び大激戦となり、我歩兵は砲兵の有力なる掩護の下に力戦したのである。一方に

於ては、門司少佐は、七時半、歩兵一中隊を率ゐて、富田大隊の稜線に達し、曰く、砲兵をして、其城壁に破牆孔を穿たしむるの要ありと、乃ち三村中尉をして、之が偵察をなさしめたのである。中尉は復命して曰く、城壁の屈折部に一小孔の通ずるあり、而かも何等障碍物の設置なしと。少佐は直ちに三村中尉に一小隊を授け、其屈折部に肉薄せしめた。其屈折部の小徑とは、即ち玄武門の在る處である。砲火を冒して玄武門に至れば、門扉固く鎖されて、容易に開くことを得ない。中尉は、部下十六人の決死隊を指揮して、牆壁を攀ぢ、樓門に登つた。乙密臺の敵兵は、之を見るや、猛烈に砲火を浴せかけたのである。我兵は樓上の低牆に據りて、纒かに、應戦するを得たのみであつた。この時、十六名中に、一等卒原田重吉なるものあり、敵彈雨下の内に、奮然身を挺して壁内に

飛び乗り、内より門扉を開きたれば、小隊一時に城内に侵入するを得、牆壁及び附近堆土に據りて、乙密臺の敵と對戦した。時正に八時三十分であつた。これより先き、牡丹臺は、既に山口大尉の占領に歸したのであつた。午前八時、石田大隊は門司大隊の掩護を以て箕子陵高地を占領し、尋で支隊の大部は、九時頃此地に集合し、一部は七星門方面を警戒し、首力は前面城壁上の敵と相對し、此に激烈なる火戦を交へたのである。時に敵の一隊七星門を出で、突進し來り、その先鋒約二百名は、忽ち箕子陵高地の西南角に達し、まさに支隊の右翼を突かんとした。然れども我砲兵の射撃と、歩兵中隊の邀撃に合ひて、忽ち潰走して、七星門に退却した。此突撃は、奉軍司令官左寶貴が、葉志超等の怯懦に憤慨し、死を決して、恩賜の正衣を着し、手兵を提げて、先頭に立つた

もので、勢ひ勇猛なりしも、左寶貴遂に我砲弾に殲れて、残兵悉く潰走したのである。

(二) 師團本隊は、十四日夜半、前進を起し、一部は午前六時頃、ヨツタルマルクの高地を占領した。此時、景昌門附近の敵兵我に向つて射撃を開始し、我は鼎山東北の平野に進出せしも、此附近一帯は普通江岸にして、泥濘深く進退甚だ困難を極め、一時兵を後方高地に收めたのである。敵は此状を見て我軍悲境に陥りて敗走したるものと認め、安山の暗門より、兵若干追撃し來り、進んで普通江に出んとせしも、我軍之を撃退し、其後、逆敵數回に及びしも、何れも全滅の慘狀に陥らしめたのである。午前十時三十分に至り、彼我の砲聲暫く止む。師團長は、先づ平壤外部の占領を實行せんがために、歩兵一中隊を暗門方面に派し、残

餘の歩兵六中隊を以て、ヨツタルマルク丘阜及び甌山街道を占領せしめ、三中隊を以て、江西街道を扼し、殘餘を以て、大湯洞附近に豫備たるべきの命令を下した。諸隊のまさしに、其配備に就かんとするや、安山堡壘の砲兵再び起ちて、猛火を大湯洞に集中せしも、射法頗る拙劣なるのみならず、彈丸亦炸發せざりしを以て、我兵は故障なく、午後一時全く其配備を終るを得たのである。時に偵察隊長落合大尉還り報じて曰く、敵兵依然として陣地に在り、他に著しき變動あるを認めずと、由て師團長は、此日は攻撃を中止し、若し敵情に變化なく、又他方面の情況之を許さば、翌未明の暗黒に乗じ、暗門附近に肉薄強攻するの方策を執らんとし、以て午後二時三十分に至つた。

(七)

九月十五日午後四時四十分、城壁上の射撃俄かに息む。怪みて、城上を望めば、乙密臺に掲揚せし將旗は、之を撤して、白旗に代へ、且つ城内の各所に於て、同時に白旗の翻々たるを見る。依て元山支隊長は、號音を以て、射撃中止を命じた。時に一韓人、使者として書簡を携へて來る。是れ平安道監司閔丙詭で、清軍の降服を傳へるものであつた。文意に曰く、清軍既に萬國公法に照らし、白旗を掲げて戦ひを休み、依て各々其國に歸らんとす、願くば、之を追撃すること莫れと。支隊は其使者に對し、降服の本義を説き、直ちに軍隊を率ゐて入城せんとするの意を通じたのである。然れども、使者は、入城を明朝に延期せられんことを請ふこと切であつた。會々、立見少將より入城の命令ありて、支隊歩兵全部は、箕子陵附近に集合し、軍旗を高く掲げて、天皇陛下の萬歳を三

唱し、歩武肅々として行進譜を吹奏し、七星門に進行する際、更に入城中止の命令あり、乃ち一夜を壘中に徹することゝなつた。

師團長は、午後七時過ぎに至り、初めて杉山中尉の報告によりて、敵兵白旗を掲げたるため、朔元兩支隊は、今や入城の準備中にあることを詳かにしたのである。然れども、師團長は、是れ我を忘らしめ、夜間を利して、脱走せんとするの詐術にあらざるやを疑ひ、嚴重なる警戒を命じた。果せるかな、清兵夜陰に乗じて、三々五々低地溝沼の間を潜行し、巧みに甌山方面に逃走するを見、我隊は之を追撃したのである。

かくて、十六日未明、全軍威風堂々として、平壤城に入り、完全に之を占領し、直ちに城内の警備の整理にあつたのである。

大正大正正
 昭昭和和和
 三十三十三
 四三三三三
 年年年年年
 九六九五五
 月月月月月
 十十三十十
 五八十八五
 日日日日日
 四三再發印
 版版版版版
 發發發發發
 行行行行行



著者 廣 瀨 憲 二
 平安南道平壤府八千代町六八番地

發行者 齋 藤 岩 藏
 平安南道教育會幹事長

印刷者 三 谷 滿 太 吉
 平壤府大和町九番地

印刷所 三 谷 活 版 所
 平壤府大和町九番地

發行所 平安南道應內 平安南道教育會

終

